人が人を育てる大学・北海道教育大学の学生発信マガジン　学園情報誌［ヒュー・ランドスケープ］

HUE-LANDSCAPE

Spring/Summer 2016
NO.24

特集

大解剖！気になる実習、噂の研修。

札幌キャンパス／
生物学教室の恒例実習「野外実習」と「臨海実習」

旭川キャンパス／
体験型コンサート！　児童と感じる音楽

釧路キャンパス／
新入生研修～教育の原点・へき地小規模校訪問

岩見沢キャンパス／
ミュージックキャラバン プロジェクト2015

函館キャンパス／
地域の課題を解決！　「地域プロジェクト」

本当？
!?
そうなんだ
へぇ～!!
!!!
なるほどね…

蛇穴新学長にインタビュー！

人が人を育てる、北海道教育大学。

Interview

平成二十七年十月より、蛇穴治夫先生が北海道教育大学長に就任されました。この機会に、蛇穴学長のお人柄やご専門、学長のお仕事について、また、学長から見た北海道教育大学の魅力についてお話を伺ってきました。

PROFILE

国立大学法人
北海道教育大学 学長
蛇穴 治夫
（じゃあな はるお）

専門は生物学。昭和31（1956）年青森県生まれ。北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。昭和59（1984）年北海道教育大学旭川分校に採用、平成17（2005）年より同大学教授。平成19（2007）年～27（2015）年の国立大学法人北海道教育大学理事を経て、平成27（2015）年10月より現職。

蛇穴学長の学生時代

―本日は、お忙しい中、お時間を頂きありがとうございます。先生は、趣味など、学生時代はどのように過ごされていたのでしょうか？

学長　生まれ育った弘前の高校から北海道大学に進学し、札幌で学生生活を送りました。中学・高校と、吹奏楽部に所属してトロンボーンを吹いていたこともあって、クラシック音楽を聴くことが多かったのですが、サザンやユーミン、ビリー・ジョエルなども好きでよく聴いていました。

―大学でも吹奏楽やオーケストラなどのサークルに入られたのですか？

学長　先輩がオーケストラ（交響楽団）にいたので、私も入ろうかと思っていたのですが、見学に行くとあまりにレベルが高いのでやめておきました（笑）。ほかのサークルにも結局は入らず、大体、好きな音楽を聴いていました。あと、学生時代には本をたくさん読みましたよ。大学に入って周りの人たちの優秀さに圧倒されて、読むようになりました。自然科学的なものはもともと好きだったのですが、人文・社会科学系のことは高校時代に勉強したとは言えず、大学入学直後に心を入れ替えました。あと、友達と一緒に遊んだり飲みに行ったりしたのは、今の学生と変わらないと思います。

―先生は、理学部に進まれ「イトミミズ」に関することを研究テーマにしたと伺っていますが、その研究テーマを選んだきっかけを教えてください。

学長　私の指導教員は、精子や卵子の形成と受精に関わる研究をしていて、さまざまな動物の比較研究を行っていました。当時その先生は、雌雄同体の動物に注目されていて、同一個体内での精子・卵子形成の仕組みを明らかにしたいとのことでした。イトミミズでその研究は誰もやっていないということだったので「私がそのテーマをやります」と言って決まったのです。卒業研究の具体的なテーマは精子形成の過程を明らかにすることでした。

イトミミズのことなんて何も知らなかったのですが、卒業研究を始めたら、自分の研究対象のことはとことん知りたくなりました。だから、イトミミズに関する文献は、直接テーマに関係ないものも含めてたくさん読みました。一生懸命勉強すると「イトミミズを金魚の餌にしないでほしい」（笑）って思えるほど、自分に与えられた動物って好きになるのです。

学長の仕事

―学生から見ると学長の仕事はよく分からないのですが、どういうお仕事をされているのですか？

学長　一言で説明するのは難しいのですが、一つには自分の大学をどうすべきかを考え、それが実現できるような仕組み作りに取り組むことだと思います。ただ、それだけでなく、同じ目的を持つ大学・学部、さらには国立大学全体をどうしていくべきなのかも考えて、場合によっては国の政策に対して意見を言うことも学長の仕事です。

「自分の大学をどうすべきか」という中には、養成すべき人材像を踏まえて教育課程をどうするかという問題があります。それから、大学として地域に貢献するための研究をどう進めていくか、具体的には、それぞれの研究テーマを持っている先生方に、例えば学校教育に関わる研究にどうやって取り組んでもらうか、その仕組みを作ることも含まれます。

―学長の役割は具体的にどのようなことでしょうか？

学長　大学の使命を果たすための方針を掲げ、予算を確保して必要な人材と設備を整え、社会のために大学を運営することです。そのために、学長の下に、教育・研究・入試・学生支援・国際交流・地域貢献などを担当する理事・副学長がいます。私が考える方針を一緒に検討し、実現に向けて事務職員と共に具体策を考える人たちです。作成した案について各キャンパスの先生方と話し合う場があり、そこでの意見を踏まえて方針を決定して、それを大学全体で実行に移すという一連のプロセスの最終責任者が学長です。

国立大学はつぶれないと思っているかもしれませんが、今やそういう時代ではありません。「こういう大学にしなければならない」と常に向上心を持って取り組まないと、大学経営のための予算が削られていく仕組みになっています。そうならないように取り組むことが、学生の教育研究環境を維持し、また、教職員の皆さんが安心して仕事や生活ができることにつながるのです。

―大変なお仕事なのですね。

学長　私は、学生さんが好きなので苦にはなりません。彼・彼女らが「いい大学に入った」と思える大学にしたい、というのが私の仕事の基本です。国立大学には、社会が必要とする人材の養成が求められています。その期待に応えることが大学の第一の仕事で、人材養成は「教育」そのものです。人としてどう生きるかを学び、期待されている力をしっかり身に付けて社会に出ていけるよう、教養と専門を身に付けるところが大学です。そのことを一人一人の先生が学生に教えていかなくてはなりません。それから、大学は「研究に基づいた教育」の場だと思います。教科書に書いてあることにとどまらず、実践に生きる、先生方の研究ベースの授業を大事にしなくてはなりません。

―大学の研究とはどういうものなのでしょうか？

学長　先生方は自分の研究テーマを持って日々研究されています。教員養成大学の場合、それだけでは社会の期待に応えているとはいえません。例えば、北海道の子どもたちの運動能力が低いといわれていますよね。このような課題に対し、大学の運動生理学や運動学、栄養学、行動学などのさまざまな専門家が、それぞれの立場から実証的な研究をして統合し、その成果を教育現場に還元することが必要なのです。

学生が「いい大学に入った」と思える大学にしたい、というのが私の仕事の基本です。

安心して学べる環境の構築とカリキュラムの実質化に向けて

―学長として、特に力を入れていきたいことはどんなことでしょうか。

学長　学生が安心して卒業まで学べる環境を整えることです。本学の学生は、必ずしも経済的に恵まれた環境の学生ばかりとは限りません。前学長の時に国に強く要請したこともあって、以前に比べて多くの学生の授業料を免除することが可能になりました。問題は奨学金、つまり勉強を続けるための生活費です。奨学金は、日本学生支援機構などのものだけでは足りないと思っています。そこで、制度に明るい職員の力を借りながら、基金を募って大学独自の奨学金制度をつくれないかと考えています。基金づくりのためなら、私も世の中や卒業生に目的を丁寧に説明し、一人一人からは少なくてもいいから、広く資金を集めたいと考えています。これが一つ目です。

―二つ目はどんなことですか？

学長　二つ目は、カリキュラムを「体系的・有機的なもの」にしたいということです。例えて言うなら、人の体には無駄な細胞なんてありません。全体が関連し合って一個体を動かしています。つまり、全ての細胞が"有機的"につながっているのです。カリキュラムも同じだと考えています。全ての授業がどこかで有機的に関連し合って教員の養成につながっています。教科内容研究科目と教科指導科目をきちんと関連づけて機能させるだけでなく、順序性や理論と実践の往還にも配慮する必要があるでしょう。

ところで、周りの先生方の出身学部がどこか知っていますか？　本学は教育学部のみの単科大学ですが、先生方の出身学部は、教育学部だけでなく文学部・経済学部・理学部・工学部……など幅広い、ある意味特殊な学部なのです。この厚みが本学の魅力や強みではあるのですが、先生方には、おのおのの研究に取り組んでいただくと同時に、出身学部での教育とは限らないので、授業は、本学の課程・学科の人材養成の目的に則した内容で、さらに、必ず他の授業と結び付いていることを意識して行ってほしいと思っています。カリキュラムの実質化にはまだまだ課題がありますので、検証してより良いものにしたいと考えています。

人が人を育てる、北海道教育大学。

―学生を含めて北海道教育大学の魅力はどういうところにあると思いますか？

学長　旭川校（当時の名称は旭川分校）に赴任した当初（もう三十年も前です）、びっくりしたことがあります。当時の旭川校では、入学後すぐ、学生を一人一人の先生（研究室＝ゼミ）へ配属してしまうんです。一人一人の学生と、一年生から四年生まで、毎日の健康状態が分かるくらい付き合うことになります。学生と会っていろいろな話をするうちに、教員養成大学は、こういうふうにして学生を育てるのが一番なんじゃないかと思いました。「人が人を育てる、北海道教育大学。」というキャッチフレーズを見たことがありますよね。まさにそれを地で行くということです。旭川校だけでなく、どのキャンパスでも先生と学生の距離が近く、学生がいろいろなことを相談できる環境があります。それが他の大学には無い誇れるものだと思います。だから、専門の話に限らず、いろいろな話を先生としてみたらよいと思いますよ。

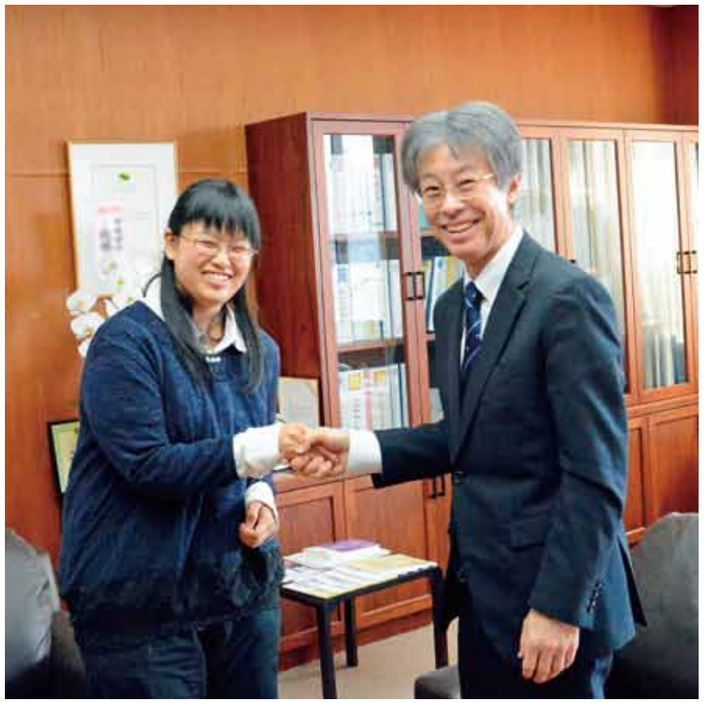
それから、学生との関係の中で分かってきたのは、北海道教育大学には、性格的に素直で、やらなきゃいけないときには一生懸命物事に取り組む学生が多いということです。これも、どの大学にも負けないことだと信じています。

北海道教育大学には、性格的に素直で、やらなきゃいけないときには一生懸命物事に取り組む学生が多い。これはどの大学にも負けないと信じています。

―最後に私たち教育大生に一言メッセージをお願いします。

学長　北海道教育大学には、良い学生がいて、そして魅力的な先生方が揃っています。学生には、北海道教育大学で勉強できて良かった、この大学を卒業して良かったと、誇りと自信を持って社会で活躍してもらいたいですね。私も、その責任を負わなければならないと思っています。私自身が学生に育てられ、この大学で一生懸命やろうと思わせてくれたので、学生に恩返しをしたいという思いがあります。「いい大学を出た」と後で思い返してくれるような大学にしたいと思っています。

―貴重なお話、ありがとうございました。



-Interviewer-

松尾 知実
（まつお ともみ）
札幌校・教員養成課程・
総合学習開発専攻・環境教育グループ３年

たくさんお話をしていただいたのですが、誌面の都合で全部は載せられないのが残念です。「この大学を出たことを誇りに思ってほしい」という言葉の後に、学長としてそう言ってもらえるように責任を持たなければ、とおっしゃられたのが印象的でした。理想を相手に求めるだけでなく、ご自分のことをすぐ省みられる姿に、この大学と学生のことを深く真剣に考えてくださっていると感じました。

HUE-LANDSCAPE
Spring/Summer 2016 No.24

Contents

2　蛇穴新学長にインタビュー！
人が人を育てる、北海道教育大学。

6　特集
大解剖！
気になる実習、噂の研修。

6　札幌キャンパス／教員養成課程
生物学教室の恒例実習
「野外実習」と「臨海実習」

8　旭川キャンパス／教員養成課程
体験型コンサート！　児童と感じる音楽

10　釧路キャンパス／教員養成課程
新入生研修～教育の原点・へき地小規模校訪問

12　岩見沢キャンパス／芸術・スポーツ文化学科
ミュージックキャラバン　プロジェクト2015

14　函館キャンパス／国際地域学科
地域の課題を解決！「地域プロジェクト」

シリーズ

16　研究ファイル
高久 元 先生（札幌校）

18　キャンパス長からのメッセージ
海老名 尚 先生（旭川校）

19　札幌キャンパス便り
20　旭川キャンパス便り
21　釧路キャンパス便り
22　岩見沢キャンパス便り
23　函館キャンパス便り

24　人気講座紹介（岩見沢キャンパス）

25　新任の先生方
25　INFORMATION①

26　大学院生の研究紹介（函館校）

27　保健管理センター発
28　国際交流NEWS 各校発（釧路キャンパス）
29　国際交流NEWS 国際交流・協力センター発
30　INFORMATION②
学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局から

HUE-LANDSCAPE

このキャンパスから眺める今現在の風景と、これから創造していく自分と社会の風景という意味をこめてつけました。
●HUEは "Hokkaido University of Education" より

特集

大解剖！気になる実習、噂の研修。

さまざまな特色を持つ5つのキャンパスがある
北海道教育大学は、実習や研修の形も多種多様です。
「あのキャンパスではどんな実習をしてるんだろう？」
「こんな研修をするって聞いたことがあるけど、本当かな？」
そんな風に思ったことはありませんか？
なかなか知る機会がないことだけに、
気になる人もいるのでは？　ならばその実態を、
HUE-LANDSCAPEが大解剖しましょう。
さてさてどんな驚きが飛び出てくるか、お楽しみの始まりです。

キノコの同定を行う学生たち

札幌キャンパス［教員養成課程］

*SAPPORO Campus

生物学教室の恒例実習
「野外実習」と「臨海実習」

皆さんが所属する研究室やゼミナールではどんな実習を行っていますか。同じキャンパスでも他のゼミを知る機会はそうないかもしれません。今回は、札幌校生物学教室で行われている野外実習と臨海実習について紹介したいと思います。いずれも研究発展科目です。

-Reporter-

松尾 知実
（まつお ともみ）
札幌校・教員養成課程・
総合学習開発専攻・環境教育グループ３年

実習から、理科教師に必要な知的好奇心を養うことができました。他学年、他専攻の方との交流にもつながっており、泊り込みで行う実習だからこそ得られる人とのつながり、集中した学びの時間でした。自分の所属する専攻以外の実習は知る機会が少ないと思います。この記事を読んで、友人との話題の1つになればうれしいです。

野外実習

生物学教室は、植物や動物の研究に取り組む先生方のもと四つのゼミナールがあります。四ゼミナール合同で毎年行っているのが「野外実習」です。この実習には生物学教室所属の一年生から四年生全員が参加し、春と秋との年二回実施されています。春には、岩見沢校に近い利根別自然休養林（通称：利根別原生林）で、植物の採集や動物、昆虫の採集を行います。そして、秋には北海道大学苫小牧研究林の原生林でキノコの採集を行います。どちらもここ何年間にわたり継続しているもので、採取したものの種名などを特定する「同定」を行い、生物リストを作成する実習です。歴代の先輩たちが作成したここ数年のリストと、私たちが今回作成したリストを比較し、植物種の繁栄や衰退の様子、外来種の侵入の様子などを考察します。

春の実習は日帰りですが、秋に行われる実習は一泊二日の日程です。特に、秋の実習は学生の間で「キノコ狩り」と呼ばれています。以下は私が参加した時の様子です。

札幌キャンパスがある札幌市北区あいの里から教育大学のバスで三時間ほどで、実習が行われる北海道大学苫小牧研究林に到着しました。お昼に到着すると早速部屋割りを確認し、昼食を取る暇も惜しんで準備を終わらせ、採集に出掛けました。キノコ採集では、長靴、防水素材のジャンパーなどは必需品です。キノコ採集以外にも、植物の実を観察したり、鳥の声を聞いたりと、普段触れることのない山間ならではの自然を楽しむこともできました。

約一時間の採集後は、キノコの同定、観察を十四時ごろから開始して十八時の夕食まで行いました。キノコの図鑑を確認しながら大体の種名を決めました。ゲスト講師（キノコの専門研究家）にご指導いただきながら、キノコのヒダの形、ツボの有無や胞子などを、肉眼や顕微鏡などを用いて観察しました。先輩方は、一目見ただけで大体の名前がわかるので、ご自分の分が終わった後は、一年生が採取したキノコの同定を手伝われていました。

夕食後、キノコについての講義を受けました。今年は、北海道大学総合博物館研究員の小林孝人先生から、沖縄で発見したキノコについてのお話や、キノコを見分ける際に注目する点について講義していただきました。

二日目は、八時から朝食を取り、九時には再び採集に向かいます。昨日向かった方向とは別方向の、植生が異なるところでのキノコ採集です。昨日見たものとは形が異なっているものが多く、生えている木によって、キノコの種類が異なっていくことを実感できました。その後また同定を行い、リスト作成用の学名などが書かれた紙を回収しました。

実習は一泊二日で終わりではありません。帰宅後にもリスト作成を行います。リスト作成では、自分では見つけられなかったキノコや、昨年は見られなかったキノコがあることがわかりました。たった一年の間にキノコの種類が変化したことには驚きました。来年は二度目のキノコ採集になりますが、後輩の同定を手伝えるくらいにキノコについて詳しくなっておきたいと思っています。

臨海実習

二年生のみで夏季休業中に行われるのが「臨海実習」です。日本海に面した小樽の忍路（おしろ）湾の入り江にある臨海実験所にお世話になり、四泊五日で行われました。乗り越えると、生物学では必須のスケッチの技術が向上するといわれるこの実習。どのようなものか、ご紹介します。

忍路臨海実験所

二十七年度の履修学生は九人と少なかったので現地集合となりました。小樽まで電車で向かい、そこから三十分ほどバスに揺られ、小樽の街並みを過ぎてから見えてきた海はとても青く、札幌では味わうことのできない感動を与えてくれました。しかし、降り立つ「忍路」というバス停は、忍路湾に面して、周りに海と道路しかないので、不安になりながら降車しました。バス停から実習前に渡された地図を頼りに歩くこと三十分。ようやく木造の実習場所、もとい宿泊場所が見えてきました。私たちの宿泊先は「北海道大学忍路臨海実験所」という施設で一九〇八（明治四十一）年に設置された、百年以上の歴史を持つものです。歴史を感じさせる建物には、実験室や食堂、応接室、水槽付きの教官室などがありました。写真の通りレトロな建物です。

採集に向かう学生たち

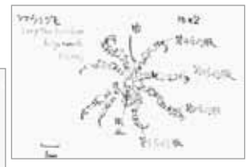
実習の一日目は十三時から始まりました。四泊五日の実習オリエンテーション後すぐに、寸胴（ずんどう）（わかります？　魚屋さんや漁師さんが履いているような腰まですっぽり入る長靴です）に着替えて海に出ました。実験所の管理人さんが、エンジン付きの小型船で採集場所まで連れて行ってくださいました。採集場所は、入り江奥に建てられた実験所の窓からもよく見える、入り江内の磯でした。

まずは「植物編」です。初日から三日目までは植物採集が中心です。まずは目に付く海藻を片っ端から採取し、バケツに入れていきます。初日ということもあり、物珍しさからカニや貝なども採取しました。実験室に戻ってからは、ひたすら同定を行いました。夕食後も同定を行いますが、海藻の見分けはなかなか難しく進みません。色の違いは枯死しているためであったり、個体差による大きさの違いもあったりと意外と難しいものでした。三日間、採集、同定、講義、観察、標本作成を繰り返しました。植物編で最もつらかったのはやはり同定だったように思います。

四日目からはいよいよ「動物編」です。同じ磯に採集に向かい、ウミグモやカニ、エビなどを採取しました。戻ってからは同定を行います。動物の場合は特徴が比較的わかりやすく、植物よりも早く同定が終わりました。ウニの発生も観察するため、ウニの解剖を行い、発生をさせました。ここからが「動物編」のつらいところです。同定が終わった動物と、発生したウニのスケッチを行うのです。点描が大変で、手がこむら返りを起こしたようになったのは初めての経験でした。

五日目は十時の解散でした。朝から掃除を行い実験所に別れを告げます。同じ生物学教室の同学年同士といっても、小学校教員を目指す基礎学習開発専攻の学生と中学校教員を目指す総合学習開発専攻の学生とでは、免許科目の違いもあり、初日はなんとなく他人行儀だったのですが、この五日間でいつのまにか仲良くなれました。先輩から聞いていた通り、実習の終わりにはスケッチの速さと、図鑑を使用した同定の速さも上がり、帰途に着きました。バス停までの道では、初日あんなに感動と不安の両方を与えていた塩谷湾が見えます。砂浜には海藻が流れ着いており、「ああ、あれはホソメコンブかな」とつい同定している自分に苦笑しました。

ヨコエビのスケッチ



ウミグモのスケッチ

特集 大解剖！気になる実習、噂の研修。

楽器の演奏

*ASAHIKAWA Campus

体験型コンサート！

児童と感じる音楽

さまざまなボランティア活動に参加している旭川校。その中でも、芸術・保健体育教育専攻音楽分野はフレンドシップ事業（注）に参加し、音楽遊び体験型コンサートを行っています。今回はメンバーの久保さんに、活動内容から児童との関わりまで、貴重な体験を余すところなく語っていただきました！

久保 允人（くぼ まさと）さん
北海道教育大学大学院・教育学研究科（旭川校）・教科教育専攻・音楽教育専修１年

-Interviewer-
岩橋 瞳（いわはし ひとみ）
旭川校・教員養成課程・英語教育専攻２年

ユーモアと優しい笑顔を交えながらインタビューに答えてくださり、活動の様子や、久保さんにとってとても貴重な経験となったということがよく伝わってきました。今後私も多くの活動に参加したいと思いました！

どんな活動？

―活動内容を教えてください。

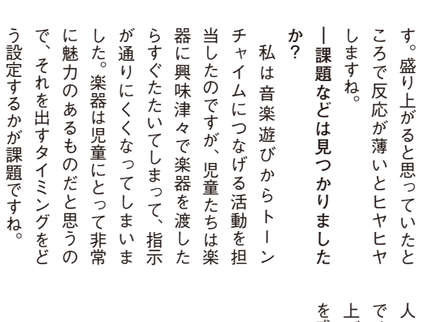
小学校低学年ではストロー笛を作る活動、中学年では音楽遊びからトーンチャイム（アルミ合金製のパイプをたたいて共鳴させるハンドベルに似た楽器）の演奏につなげる活動、高学年では実際に楽器を吹いて体験する体験型音楽鑑賞の活動を行いました。

―この活動（音楽遊び体験型コンサート）はいつから始まったのですか？　また始めようと思ったきっかけを教えてください。

フレンドシップ事業には音楽分野は二十六年度から参加していると聞いています。その活動に私の同級生が参加していて、授業づくりなど勉強になることが多いと聞いたので自分も参加しようと思いました。

―この活動ではどのような曲を演奏するのですか？

今回は「上を向いて歩こう」「ハナミズキ」「ピタゴラスイッチのオープニングテーマ」「花は咲く」など児童が親しみやすく



楽器の説明

児童とのふれ合い

いと思われる曲を選びました。

―何人のメンバーで活動していますか？

今年度は大学院生（修士一年）二人と学部生（一年）二人、教員一人の計五人で活動しました。

―音楽分野以外のメンバーはいますか？

この活動は音楽分野だけで行っているものですが、フレンドシップ事業全体としては、生活・技術専攻や美術分野、保健体育分野の学生も参加しています。

児童とのふれ合い

―この活動はどのような人たちを対象としているのですか？

この活動は枝幸町の小・中学校で大学生が出前授業を行うものです。私たちは、枝幸町立問牧（とまき）小学校と枝幸町立歌登（うたのぼり）小学校で活動を行いました。

―一度の活動でどれくらいの人数を相手にするのですか？

小さな学校では十人ほどで、最大三十人ほどです。

―この活動の目標、ねらいなどを教えてください。

大学生というお兄さんお姉さんのような存在から普段とは違う授業を受けて、より音楽の勉強に興味を持ってもらうことです。

―この活動で気を付けていることはありますか？

なるべく普段できないような体験を活動に盛り込むことですね。今回でいうと、トランペットの体験演奏、リコーダーのアンサンブル演奏などです。児童が家に帰った時に保護者の方に話したくなるような内容にしたいと思っています。

活動から感じたこと

―実際に活動を行ってみた感想を教えてください。

非常に元気で人懐っこい子が多く、休み時間も鬼ごっこにすぐ連れていかれて、ふれ合う時間が多くて楽しかったです。教育実習以来、児童の前に出ることが無かったので、授業の進め方や児童の反応に対する返し方など自分自身の成長も感じました。

―活動を通して大変だと思うことを教えてください。

普段から交流のある児童に対して行うものではないので、活動を考えるときに児童の反応を予想することが難しいです。盛り上がると思っていたところで反応が薄いとヒヤヒヤしますね。

―課題などは見つかりましたか？

私は音楽遊びからトーンチャイムにつなげる活動を担当したのですが、児童たちは楽器に興味津々で楽器を渡したらすぐたたいてしまって、指示が通りにくくなってしまいました。楽器は児童にとって非常に魅力のあるものだと思うので、それを出すタイミングをどう設定するかが課題ですね。

―どんな瞬間にやりがいを感じますか？

この活動では一時間でトーンチャイムを使って合奏を行う段階に持っていくのですが、ついさっき手にした楽器を一人一音担当して、クラスみんなで演奏して一つの音楽を作り上げた瞬間に自分はやりがいを感じました。

さまざまな楽器を披露

（注）フレンドシップ事業：かつては文部科学省の事業として「教員養成大学・学部を対象に、将来教職を目指す学生が、早くから子どもとふれ合い、教師としての基礎的指導力を身に付けること」を目的として行われていたが、現在は本学独自の事業として行っている。

釧路キャンパス［教員養成課程］

*KUSHIRO Campus

新入生研修〜

教育の原点・へき地小規模校訪問

釧路校の学外での実践的な学びの場は、1年次から毎週金曜日に近隣の公立学校で行う「教育フィールド研究」など多種多様ですが、入学後間もなく新入生たちは全員、へき地の小規模な小学校で研修を受けることになります。近年「教育の原点」ともいわれている小規模校での研修は、教員を目指している学生にとって大変有意義な活動です。特に都市部の出身者にとっては、複式学級を初めて目にする衝撃的な研修となります。

今回は、二〇一四年五月三十日、釧根管内一市六町村の二十四校に散らばった新入生百九十七人の中から、屈斜路湖にほど近い、ある小学校で研修を受けた五人の学生たちに話を聞き、新入生研修の一例をたどってみましょう。この春三年生になった彼らの振り返りから、研修の意義などが浮かび上がります。

美しい季節の新入生研修——事前指導と事後指導

釧路校の新入生研修は、毎年五月末の自然が大変に美しく気候の穏やかな季節に行われます。早朝の六時台に新入生は大学に集合し、何台もの大型バスに分乗してあらかじめ振り分けられた受け入れ先の研修校へと出発します。

研修当日の二週間ほど前には、研修校ごとのグループで釧路校の引率教員から事前指導を受け、研修校とその周辺地域について下調べをすること、出身や専攻とともに自分の性格や研修に対する抱負などを書いた「自己紹介カード」を作成することが求められます。この「自己紹介カード」は事前に研修校へFAXなどで送られます。

また、研修後一週間ほどで引率教員による事後指導もあり、そこで振り返りが行われます。

研修当日の日程——ガイダンス・講話・授業参観

屈斜路湖方面では二つの小学校が研修生を受け入れてくださっているので、二つのグループが同じバスで出発しました。帰りも同じバスです。日の出が殊に早いこの時期の釧路周辺では、七時台には日もすでに相当高く、美しい湖水の見え隠れする湿原の緑を縫って、バスは一路、屈斜路湖を目指します。みずみずしい新緑の季節！

バスは新緑の中を屈斜路湖方面へ

スーツ姿で小学校を訪問した新入生たちに、まず教頭先生から当日の研修内容などが告げられます。次に校長先生の講話を伺って、いよいよ授業参観。

二学年一緒の教室。でも学年ごとに異なる向きで黒板が設えられ、児童も違う向きに座っているのです。一人の先生が、その黒板の間を行ったり来たりしながら、それぞれの学年を交互に指導されます。

その日、大学生のお兄さんお姉さんたちが来ることを告げられていた児童たちも、研修生たちが入ってくると、心なしかソワソワしているように見えます。研修生たちは児童らを背後から観察し、メモを取ります。

鹿追町出身の岸田翼さんは、「校庭も広くて普通の小学校と変わらないな、と初めは思ったのですが、教室の中が複式学級になっていて驚いたというか、これがへき地の現状なのかと実感しました。鹿追も、一応へき地のくくりにはなっていますが、複式学級を見たのは初めてで……」と振り返る。

教頭先生からガイダンスを受ける研修生

-Reporter-

佐藤 直史
（さとう なおふみ）
釧路校・教員養成課程・地域教育開発専攻・農業と環境教育研究室３年

釧路校は教育に関する研修が豊富で、本当に恵まれていると感じます。入学して間もなく行われた新入生研修、私にとっても本当に懐かしい思い出です。

-Reporter-

湧川 碧斗
（わくがわ あおと）
釧路校・教員養成課程・学校カリキュラム開発専攻・体育研究室３年

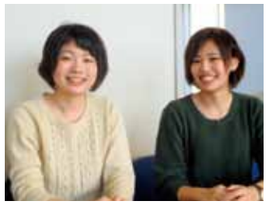
私もへき地小規模校の教員になることがあるかもしれません。そのときは、この新入生研修の感動を胸に頑張りたいと思います。

特集 大解剖！気になる実習、噂の研修。

学校カリキュラム開発専攻・美術研究室３年・岸田 翼さん

複式学級の様子

学校カリキュラム開発専攻・音楽研究室３年・宮田遥海さん


学校カリキュラム開発専攻・音楽研究室３年・横山有美さん（左）と同・人文地理学研究室３年・吉野夏奈さん（右）

体力測定の補助・児童と一緒に給食と清掃・花壇整備と種まき

長めの休憩時間でジャージに着替え、校庭で児童たちと遊んだあとは、体力測定のお手伝い。富山県南砺市出身の宮田遥海さんは、「児童たちが人なつっこいな、と思いました。率直にものを言ってくるって感じで……」と懐かしみます。「近くに病院や買い物ができる場所がないのは大変そうですけれど、大人数のクラスより教えやすそうだなって思います」とも。秋田県大仙市出身の吉野夏奈さんは、コンビニはおろか自販機のある所まで行くのに車で三十分という周辺事情に、「研修直後、私はこういう所ではやっていけないなと思いましたが、今では考え方も随分変わりました」と言います。

給食は全員で

児童たちとテーブルを並べて一緒に食べる給食。研修生たちにだいぶ慣れてきた児童は、平野達也さんに配膳された副菜の粉吹芋が一つ足りないのをすぐさま見つけ、「先に食べちゃったの？　いけないんだ、いけないんだ」とはやし立てたそうです。「初めから一つ足りなかったんだ」と弁明しても、「うそつき兄ちゃん、うそつき兄ちゃん！」の大合唱。

大学に入るまで児童と向き合うことがなかった芽室町出身の平野さんは、この一件を振り返って、次のように新入生研修の意義を語ってくれました。「『教育フィールド研究』では各教室に一人か二人で入れられて、ただただ観察をするというスタンスなので、児童とどう関わっていくかは自分で模索しなければなりません。しかし、この新入生研修では児童との距離感があまりなく、半日ほどのことではありましたが、自然に児童となじむことができ、その経験自体が『教育フィールド研究』での一つの目標になりました」と。

給食のあとは体育館や校庭で、児童と研修生が入り乱れて思いっきり遊びました。次のそうじの時間あたりから、虫の居所が悪かったのか、他の仲間としっくりいかない児童が出てきましたが、五校時の花壇づくりと種まきの授業の間には児童同士もフォローし合って和やかな雰囲気に戻り、研修生たちもホッとしたそうです。

花壇づくりを見守る研修生

六校時にはまた研修生だけになって、教頭先生からへき地小規模校の実情などを伺い、レポートを作成しました。その後、ジャージから元のスーツに着替え、迎えのバスを待っていると、児童たちが全員見送りに来てくれました。胸がジーンとする瞬間！

学校カリキュラム開発専攻・音楽研究室３年・平野達也さん

まだあった！事後の催事

大学に帰ると間もなく、研修校から「運動会のお誘い」がありました。研修の日の三週間後に開催される研修校での運動会を手伝ってもらえませんか、というもの。これに参加した恵庭市出身の横山有美さんは、「運動会もメッチャ良かった！周辺の人があんなにたくさん集まるとは思いませんでした。相当ご年配に見えるおじいさん、おばあさんがすごくアクティブで……お尻で風船を割ったりとかね！」と興奮気味。岸田さんも「学校と地域の人々との関係を垣間見たようで感動しました。行けるものなら何度でも行ってみたい学校です！」と熱く語ってくれました。

*IWAMIZAWA Campus

ミュージックキャラバンプロジェクト2015

2014年度から始まった岩見沢校音楽文化専攻による「北海道教育大学ミュージックキャラバン　プロジェクト」が、大好評につき2015年も開催されました。2014年は士別市と旭川で開催しましたが、2015年は9月27・28日の2日間にわたり北見市と美幌町を訪問し、演奏をしました。ホールに満員のお客さまをお迎えし、学生はこれまでにない充実感を味わうことができました。その時の様子を皆さんにお伝えしていきます！！

「ミュージックキャラバン」とは？

八月上旬。期末試験が終わり、夏休みが始まる…と思いきや、九月に行われるミュージックキャラバンに向けた練習に取り組む学生の姿が見られました。このイベントは、教育大学について、もっとたくさんの方に知ってもらいたい！　という趣旨で、本学の学長からの依頼を受けて学生たちが宣伝大使のような役割を担い企画されました。

吹奏楽の演奏

音楽文化専攻の学生を中心として音楽団を結成し、二日間で北海道内の二カ所を訪れます。バスで移動、宿泊しながら各地で演奏会を行うため、学生にとっては小さな演奏旅行という貴重な経験ができます。二十七年は九月二十七日に北見市にある北見芸術文化ホール、二十八日には美幌町にある美幌町民会館「びほーる」で開催されました。今回のミュージックキャラバンはオーケストラと吹奏楽の演奏に加え、学生によるオペレッタ「シマフクロウの伝言」の上演もされました。メンバーは学生の中から選抜され、学生以外にも卒業生やエキストラの方、教員も参加しており、今回は学生六十六人とその他十四人の計八十人で期間限定の音楽団が結成されました。

-Reporter-

中村 朱莉
（なかむら あかり）
岩見沢校・芸術・スポーツ文化学科・
音楽文化専攻・音楽教育・音楽文化コース３年

今回は北見市と美幌町ということで、岩見沢からはとても遠い所での公演となりましたが、参加した皆さんからは、とても楽しかった、良い経験となったとの声が多数聞こえました。このミュージックキャラバンがきっかけで、音楽が好き！　と言ってくれる方が少しでも増えてくれたらとてもうれしいです！！

オペレッタ「シマフクロウの伝言」の上演

学生によるオペレッタの上演

二十六年三月に札幌市教育文化会館で上演した学生によるオペレッタ「シマフクロウの伝言」が好評だったため、このミュージックキャラバンで再演しました。ミュージックキャラバンに合わせて短縮版台本、新キャストで試行錯誤しながら稽古を重ねました。

物語は、豊かなアイヌコタンに突然訪れた飢饉（きき）に始まります。コタンの守り神コタンコロカムイは、鹿をつかさどる神ユカッテカムイと鮭をつかさどる神チェパッテカムイの所に行って「食べ物を村人たちに与えてくれ」と伝言してくれる雄弁な者を探しています。食べ物の神様たちはなぜアイヌコタンに食べ物を与えなくなったのか？　食べ物の大切さと勇気を持って行動することについて、改めて考えさせられる物語です。

コタンコロカムイ役を演じた声楽専攻三年佐藤奈央子さんは、「前回一緒に舞台を作り上げた大切な人たちがいない稽古場は寂しかったのですが、もう一度上演させていただけるのなら少人数でも精いっぱい質の高いものを作らなければと、気合いを入れて取り組みました。苦労する場面も多かったのですが、みんなで作り上げる喜びや充実感をひしひしと味わうことのできる素晴らしい日々でした。上演後はお客さまからうれしい反響をたくさんいただけたようで、北海道全体の地域の文化に貢献することを目指し、たくさんの子どもたちに音楽を通して夢を持っていただけたら、という私たちの思いが伝わった気がします」と話されていました。アイヌを題材としているため、北海道の歴史をたくさんの方に知ってもらうことができ、また子どもから大人まで楽しむことのできる内容となっているので、来場された皆さんの心に響いたのではないでしょうか。

大人気！　楽器体験会

演奏の他に、各地で開演前に楽器体験会を行っています。この体験会は特に人気があり、楽器を持つ学生の前に行列ができるほどでした。子どもたちは積極的に自分から体験してみたい楽器のところへ並び、楽器を前にして目を輝かせていました。たくさんの方々に興味を持ってもらうことができ、幼稚園や小学生の子どもたちから、中学生、そして保護者の方にも人気がありました。吹奏楽部がある学校では管楽器を目にしたことがあるお子さんは多いと思いますが、弦楽器がある学校は少ないため、ヴァイオリンなどの弦楽器は特に人気がありました。また、一緒に来場していた保護者の方も体験したり、子どもたちが楽器を鳴らしている姿を写真や動画に収めたりしていました。普段はあまりふれることのない管弦楽器ですが、「どうしたら音が鳴るのだろう？」「どんな音がするのだろう？」という疑問を持っている子どもたちの不思議が解決されたのではないでしょうか。

楽器体験会の様子

テューバを専攻している二年鈴木舜弥さんは、「今回、子どもたちの様子を見て、楽器にさわることや音を実際に出してみることにすごく目を輝かせて楽しんでいて、昔の自分を思い出しました。今は、専攻として大学で音楽とテューバという楽器を学んでいますが、音楽を始めるきっかけとなった『純粋に音楽を楽しむ』という気持ちを忘れずに、今後も音楽とふれ合っていきたいと思います」と、楽器を始めたころの気持ちを思い出し、懐かしんでいる様子でした。学生の皆さんにとっても、参加した皆さんにとっても貴重な体験となったのではないでしょうか。これをきっかけに音楽に興味を持つお子さんが増えたらとてもうれしいですね！

おわりに……

各地で大好評だったミュージックキャラバン。このミュージックキャラバンは北海道教育大学のキャンパスがない地域を中心に訪問し、教育大学についてさらに知ってもらうために企画されました。子どもから大人まで楽しめる内容だったので、たくさんの方々からとても好評でした。佐藤さんや鈴木さんもお話ししていましたが、この企画がきっかけで少しでも音楽に興味を持つお子さんが増えてくれたらとてもうれしいです。これからもこのような企画を通して、教育大学の魅力などをたくさんの方々に伝えていくことができたら…と思います！

地域政策グループの地域プロジェクトの様子。学生が考え、まとめたスライドを企業の方に発表しています。

*HAKODATE Campus

地域の課題を解決！「地域プロジェクト」

2014年に人間地域科学課程から国際地域学科への変化を遂げた函館校は、新たな試みとして、2015年に「地域プロジェクト」を始めました。今回は、今後の函館校の看板となる期待の詰まった科目「地域プロジェクト」の実態をのぞいてきました！

「地域プロジェクト」について地域プロジェクト運営委員長小林真二教授に伺いました

―「地域プロジェクト」ってなんですか？

小林先生　平均五・六人ずつの学生がチームを組み、地域の課題を解決するためのプロジェクトに取り組むＰＢＬ（Project Based Learning or Problem Based Learning）型科目です。各チームに教員も付きますが、あくまでも学生自身が地域と連携しながら主体的に活動を進め、フィールドワークや企画などを計画・実施する点に特徴があります。実践的な活動を通し、学生たちには地域のさまざまな現場で活躍していくための力を身に付けてほしいと願っています。プロジェクトのテーマは国際地域学科のグループ・専攻、「国際協働」「地域政策」「地域環境科学」「地域教育」の各特性を生かしたもので、全部で五十以上もあるんですよ。

―五十以上もあるんですか!?

小林先生　そうなんですよ！全国的に見ても、これほど大規模に地域連携型ＰＢＬを実施しているところはまだないはずです。これからの函館校の目玉の一つになるんじゃないかなと期待しています！

―まさに「地域プロジェクト」は「国際的な視野と教育的なマインドを持って地域振興を担う人材を養成」という学科のカリキュラムの趣旨に合わせたものなんですね。小林先生、ありがとうございました。

-Interviewer-

堀江 音名（ほりえ ねな）
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ２年

地域プロジェクトについていろいろと分かりとても楽しかったです。「自主性」が自分には欠けているなと思ったので、自分が履修するときには「地域プロジェクト」で身に付けられるようにがんばりたいです！

-Interviewer-

浜田 亜弓（はまだ あゆみ）
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・地域政策グループ２年

今回、地域協働専攻地域政策グループと地域教育専攻の地域プロジェクトを取材させていただき、どちらも学生の将来に役立つ力が身に付く授業だと分かりました。また新たに始まったこともあり、学生だけでなく、先生方も興味を持って取り組まれている授業であることも知りました。取材に協力してくださった皆さまに感謝します。ありがとうございました。

〈国際協働グループの地域プロジェクト〉
松田教男教授と菅原健太講師担当

―先生方の「地域プロジェクト」ではどんなことをしているのですか？

松田先生　私たちのところでは「外国人の視点による観光情報の充実と新商品（プログラム）の提案」をやっています。このプロジェクトでは学生と留学生で現地に行き、今まで注目されてこなかった地域の観光資源の魅力を発見してＰＲしていく予定です。留学生に協力してもらってというのが私たちの地域プロジェクトの大きな特徴かな。

―留学生を巻き込んで、ですか！すごいですね。この地域プロジェクトを通して学生に伝えたいメッセージをお願いします。

松田先生　このプロジェクトは地域との連携、どうやってＰＲしていくかなどすべて学生主体です。私たち教員はサポート役です。ここでは、地域にどんなメリットがあるかを考えながらの交渉力や企画力、また多くの人と関わるのでコミュニケーション能力も必要です。どういった視点で捉えてきちんとしたステップで進めていくか。そういう社会に出たときに必要な力を、この地域プロジェクトのプロセスの中で、学生が自分たちで考えながら動いて身に付けていってほしいと思います。

―松田先生、ありがとうございました！

松田先生と菅原先生の地域プロジェクトには、旅行や観光が好きな学生や観光商品の開発について興味がある学生がいます。「学生が主体なのでもっと発言しないと！」「若者・学生らしさをアピールできたら」「自分のやりたいことができる」と学生は活発な雰囲気。冬は交通の関係で現地に行きにくいなどの苦労がありながらも「あまり悩まないで自分たちにできることを！」と、積極的な姿勢で取り組んでいます。

〈地域政策グループの地域プロジェクト〉
後藤嘉也教授担当

活動内容

「道南地域企業就職応援プロジェクト～函館、道南で頑張る中小企業を紹介するリクルートブック作成～」というプロジェクトです。このプロジェクトでは、受講している学生八人自らが、函館、道南地域にある中小企業を訪問し、レイアウトなど一からリクルートブックを作成することを行っています。

このプロジェクトに対する思い

この地域プロジェクトという授業は二十七年度から始まった科目なので、先生自身もどのようなものになるのか、とても興味深いそうです。中小企業を自らの力で訪問することで地域との協力の過程で培われるコミュニケーション力や、仲間との共同作業を通して培われるチームワーク力を身に付けていってほしいとおっしゃっていました。このプロジェクトを通して、大学生の、社会人に対する接し方や、企業はどういうところで何をしているところなのか、を学生自身が学ぶことができます。これを通して、学生の就職率がアップするかもしれませんね。

国際協働グループの地域プロジェクトの様子。今後の計画を立てています。

地域政策グループの地域プロジェクトの様子。学生が企業の方にこの日の概要を伝えています。

〈地域教育専攻の地域プロジェクト〉
細谷一博准教授担当

活動内容

「Enjoy Study プロジェクト」という活動です。この活動では、放課後の時間を使い、小学生の子どもたちが〝活動することって楽しい！　学ぶって楽しい！〟と思えるよう、遊びを中心としたプロジェクト活動を行っています。このプロジェクトは市内の二つの小学校の協力を得て、学生が主体となって子どもたちとふれ合うことで、将来教員になるために必要な力を育てていきます。二つの小学校を合わせ、約百二十人もの小学生が参加しています。学生はそれぞれ六人ほどのグループに分かれ、各グループでどういうことをすれば子どもたちが楽しんでくれるかを考え、活動を企画し実践します。

活動の企画

企画のテーマは各グループで設定されています。そのテーマに沿って「教科的に」考えていきます。例えば、理科を基に考えるとしたら、理科室を使って子どもたちが楽しんでくれるような実験などを企画します。

地域教育専攻の地域プロジェクトの様子。学生が作ったカードゲームを小学生と一緒に楽しんでいます。

地域教育専攻の地域プロジェクトの様子。学生が小学生の前に立ち、活動の内容を説明しています。

研究ファイル

札幌校／教員養成課程／
理数教育専攻

高久 元先生
（たかく げん）
札幌校教授

ダニ類の分類や生物地理などの多様性についての研究

私たちの周りには有害・有益なダニたちがたくさん存在しています。森林などの土や落ち葉の中にいる土壌性のダニ、昆虫の体に乗って移動する便乗性のダニ、動植物の体液を吸う寄生性のダニなどさまざまです。そのような多様なダニ類に関する研究や教育活動の一部をご紹介します。

PROFILE

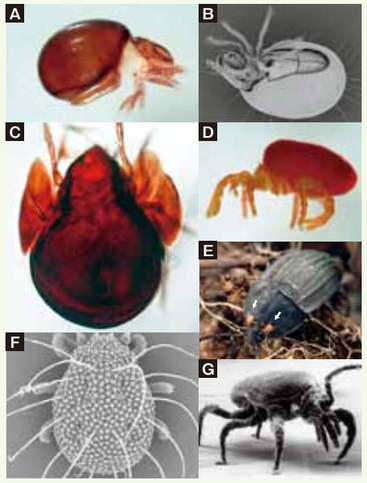
秋田県秋田市に生まれ、高校卒業まで秋田で育つ。海、川、山が比較的身近にあり、生き物に触れる機会に恵まれていた。北海道大学理学部生物学科で動物学を学び、その頃『ダニの話』（青木淳一著、北隆館）に出会いダニの面白さを知り、興味を持ち始める。卒業研究では海産無脊椎動物の幼生の付着変態機構の研究を行うが、同大学大学院理学研究科修士課程から昆虫便乗性ダニ類の分類学的研究に着手する。修士課程修了後に同大学理学部助手となり、その後平成14年10月より北海道教育大学札幌校に着任。専門は東アジア、東南アジアのハエダニ科ダニ類の分類、生物地理、土壌性・便乗性トゲダニ類の分類など。

顕微鏡観察中の筆者

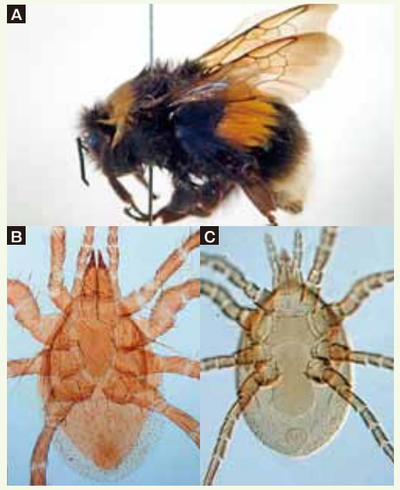
ダニはどんな生き物か

ダニは人の生き血を吸う、あるいはアレルギーのもとになる悪い「虫」という印象を持っている人が多いかと思います。しかし、実際には、人に害を与えるダニの種類はごくわずかです。現在、日本で記録されているダニは約二千種（世界では約五万五千種）ですが、人に寄生する主なダニ類はニキビダニ（顔の毛の根元にある毛包に寄生）、マダニ類（野外にいて人や獣畜から吸血）の数種、ヒゼンダニ（人の皮膚に潜り込んで寄生）、イエダニやワクモ（ネズミ類、鳥類に寄生していたものが時々人にも寄生）などで、屋内の畳、絨毯（じゅうたん）、食品などで見られるコナダニ類、チリダニ類を含めても、人に直接害を及ぼす主なダニは二十種類程度、ダニ類全体の約一％にしかなりません。他にも、農作物を加害するダニや家畜に寄生するダニなどを含めても恐らくダニ全体の一割にも満たないでしょう。それ以外のダニの多くは落ち葉や土の隙間、植物上、水の中などにいて、人には無害、あるいは有益な種もいます。森林の落ち葉を食べて糞（ふん）として出すことで落ち葉の分解を手伝っているササラダニや、農作物の害虫であるハダニを食べてくれるカブリダニ、チーズを作るのに欠かせないコナダニなどもいます。

最初に「虫」と書きましたが、ダニは昆虫とは異なり脚が八本（昆虫は脚が六本）あり、クモやサソリなどに近い仲間です。クモやサソリでは捕食性の種がほとんどを占めますが、ダニは食性が実に多様で、捕食性の種以外に、菌類（カビ・キノコ）を食べたり、落ち葉を食べたり、花粉や蜜を吸ったり、血を吸ったりする種がいます。また生息している場所も深海から高山や温泉、土の中から木の上まで、ほとんどの場所に見られます。ダニの食性や生息場所は昆虫のように多様であり、また種数も豊富で未知の種も多く、多様性研究の良い材料となっています。



さまざまなダニ類：A-C：ササラダニ類；D：ケダニ類；E：昆虫に乗るトゲダニ類（矢印）；F：カザリダニ類；G：ハエダニ類



外来種のセイヨウオオマルハナバチ（A）とそれに便乗するトゲダニ類（B、C）

分類はどのように役立っているのか

プロフィールにもあるように私の専門はダニの分類学や生物地理学です。アジアに生息するダニ類（主に、昆虫の体表にいて昆虫を乗り物として利用する便乗性ダニ類や、土や落ち葉の中にいる土壌性ダニ類）を集めては標本を作って顕微鏡で観察し、既存の標本や文献に基づいて新種かどうかを判断し新種記載、命名などを行う分類学的研究を行っています。また、さまざまな地域のダニ類の種類構成を明らかにすることで、現在の分布がどのように形成されたのかを推測する生物地理学的研究も行っています。それらの研究を通じてダニ類の多様性を解明しようとしています。さて、このような分類学、生物地理学はわれわれの生活にどのように役立っているのでしょうか？

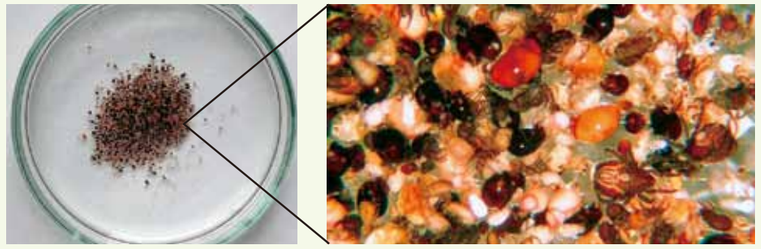
分類学や生物地理学を最も身近に感じることができるのは、動物園や図鑑などでしょう。ある生物がどのような特徴を持ち、それは何の仲間なのか、どこに分布しているのかなどの情報は分類学や生物地理学の研究によりもたらされます。また、分類の研究結果を使って、生物の種類の同定をすることもできます。同定結果と他の研究の成果から、害虫・益虫であるかなどを知ることもできます。

また、現在の生物の分布を明らかにし、それらが今後どう変化するのかをモニタリングすることで、環境の変化を知ることもできます。例えば、北海道の野外でよく見られるマルハナバチ類には複数種のダニが便乗しています。ハウス栽培野菜の授粉のために海外から導入された外来種セイヨウオオマルハナバチが北海道内で野生化し問題になっていますが、それに応じてもともと北海道にいた在来のマルハナバチやそれらに便乗するダニ類の分布や種構成がどう変わっていくのかを知るために、現状を記録しているところです。

ダニと教育の関係

ダニと学校教育とは無縁のように思われるかもしれません。確かに、教科書の中でダニが扱われることはほとんどないため、ダニの存在は身近ではないのかもしれません。しかし、私たちの周りの林や公園、神社など、土や落ち葉のある場所にはたくさんのダニがいて、片足ほどの広さの土に二千匹以上のダニがいる場所もあります。土の中のダニは、とても身近な生物であるとともに、他の動物を食べたり、落ち葉を食べたりする、土壌生態系に欠かせない存在となっています。土の中のダニは、中学校理科では食物連鎖の例に取り上げられていますし、食物連鎖を学ぶ小学校理科とも関わりがあります。

これらのダニを含む土の中のさまざまな動物を観察し、それらの自然界での役割を学ぶ機会として、地域の小中学生向けに土曜講座（探してみよう・調べてみよう！　土の中の「むし」―土曜講座に関しては学園情報誌二十二号を参照）を毎年開講し、生物領域の学生たちが指導を行っています。限られた人数、時間ではありますが、土の中の動物たち、ダニたちに関心を持ってもらえるように努力しているところです。



砂粒のように見えるが実はすべてダニ

土曜講座の様子：
土の中の生き物を探し（A）、
顕微鏡で観察し（B）、
スケッチする（C）

キャンパス長からのメッセージ

建学精神「教学半」を我がものにしよう。

私たち学生にとってキャンパス長は遠い存在で、どの先生がキャンパス長なのか分からない学生も多いのではないでしょうか。そこで、旭川校で新たにキャンパス長になられた海老名 尚 先生に、先生個人のお話に加え、キャンパス長としてのお仕事などをお伺いしてきました。

旭川校キャンパス長

海老名 尚先生

（えびな なお）

PROFILE

旭川校教授。北海道岩見沢市出身。博士（史学）（学習院大学）。1998年4月に旭川校に着任。2015年10月から旭川校キャンパス長就任。専門分野は日本史。

Q海老名先生の専攻を教えてください。

A社会科教育専攻で日本史を担当しています。

Q先生の印象に残っている研究を教えてください。

A自分の研究の出発点である歴史学者黒田俊雄先生の「顕密体制論」ですね。これを実証することが私の研究課題でした。

Q旭川校にいつ赴任されたのですか？

A一九九八年四月に赴任しました。

Q赴任当時と今とで旭川校に何か違いはありますか？

A昔は今と比べるとのんびりした雰囲気があったように思います。

Qキャンパス長にはいつ就任されたのですか？

A二〇一五年十月です。ついこの前ですね。

Qキャンパス長になられた経緯を教えてください。

A阿部 修 前旭川校キャンパス長が本学理事となられたことに伴い、その後任として学長から任命されました。

Qキャンパス長として主にどんな仕事をされていますか？

A仕事はたくさんありますよ。一言で言うと、旭川校の管理運営をしています。具体的には、大学の予算の管理や、入学式、卒業式の運営、それに加えて、学生や先生方の授業や研究などが円滑に進むように大学を運営することですね。

Qどんなときにキャンパス長としてのやりがいを感じますか？

Aまだ就任したばかりなので実感は湧きませんが（笑）、学生たち、先生方そして事務の方々にこの大学にいて良かったと言ってもらえたときですね。

Q仕事の息抜きはどうされていますか？

A愛犬（ラブラドルレトリバー）と散歩したり、戯れたりしています。本当に癒やされます。

Q先生の御出身はどちらですか？

A北海道の岩見沢で生まれて、東京の大学に進学しました。冬が寒いのが嫌だったので（笑）。でも、こちらに戻って来てから改めて北海道の良さを感じましたね。食べ物のおいしさとか冬の景色の美しさとか。

Q先生はどんな学生でしたか？

A自分の考えていることを素直に教授に言っていました。例えば、疑問や質問があれば、すぐに教授に聞きに行っていました。私が所属していたのは史学部でしたが、周りは割とおとなしい学生が多かったので、周りからそう見えていただけかもしれませんけど。あと、東京で一人暮らしをしていたので、バイトをよくしていましたね。

Qキャンパス長から見た旭川校の学生の特徴を教えてください。

A真面目な学生が多いと思います。ただ、ちょっと面白みにかけるかな。

Q旭川校の良いところはどんなところでしょうか？

A一年生からゼミに所属し、学年の枠を超えて互いに切磋琢磨しながら学べるところです。

Qキャンパス長としての抱負をお聞かせいただけますか？

A旭川校で学ぶことができて本当に良かったと、学生さんたちに言ってもらえるようなキャンパスにしたいと思っています。

Q最後に学生に一言お願いします。

A素敵な教師になるためには、教える技術も必要ですが、それ以上に自分自身の人間的な魅力を高めることが大切だと思います。精神面での自分磨きにもっとエネルギーを注いでもらいたいと思っています。そして、旭川校の建学精神である「教学半」を我がものにして卒業してほしいと心から願っています。

-Interviewer-

山﨑 将太郎
（やまざき しょうたろう）
旭川校・教員養成課程・英語教育専攻3年

海老名先生とは今回が初めての対面で、キャンパス長ということもあり少し緊張しましたが、今回のインタビューで気さくでとても面白い方だということがわかりました！　各キャンパスにはそれぞれキャンパス長がいます。皆さんは自分のキャンパスのキャンパス長を知っていますか？　これを機にどんな方かを知ってもらえたらうれしく思います。

札幌キャンパス便り

レポートの作成や講義の合間に附属図書館を利用する人は多いと思います。学習の場、憩いの場として、附属図書館は開かれています。しかし、それ以外にも、各種イベントや展示を行い、図書館が私たちに役立つ情報を発信していることをご存じでしょうか。今回は、附属図書館札幌館でのイベントと展示活動をご紹介します。

附属図書館札幌館でのイベントと展示活動

座談会で学校司書のお話を熱心に聴く学生たち

学校図書館「司書」と学校図書館

大学に欠かせない附属図書館。教育大学ならではの蔵書も多く、課題解答のために本を借りる人、静かな環境であるため試験に向けての勉強に活用する人、講義の合間の息抜きに利用する人など、毎日多くの人が利用しています。そんな附属図書館で、小学校から高等学校まで必ず設置されることとなっている「学校図書館」に関する展示や座談会などの催しがあったことをご存じでしょうか。

平成二十七年度図書館活性化プロジェクトとして、「学校司書」という専門職の活躍を、「学校図書館を知るための座談会」「学校図書館を知る資料やパネルなどの展示」によって紹介する取り組みが行われました。司書教諭や校内の先生方と協力・協働して、児童・生徒の読書や学習をサポートする専門職である「学校司書」が、二十七年度改正された学校図書館法によって位置付けられたことからこれらの座談会や展示が企画されたそうです。

展示を見る学生

座談会の様子

学校図書館の現在（いま）を知る座談会

二〇一五年十月二十四日に開催され、二十人ほどの学生が参加しました。「学校司書」はどのような仕事を行っているのか、学校図書館とはどのような場所なのかなど、実際に「学校司書」として旭川市内の小・中学校に勤務の三人の方と、空知管内の小学校に勤務の「司書教諭」の先生からさまざまなお話をお一人ずつ伺いました。学生から質問が数多くあり、それに丁寧に答えていただきました。

現場にいらっしゃる方の熱いお話から、「学校司書」がいることで、学習、読書活動が活発になることがわかり、また、学校司書の皆さんが、子どもたちのことを真剣に考えていらっしゃることを実感しました。

参加した学生からは、「学校図書館が勉強するだけの場所ではなく、落ち着く、安心できる場所であるようにするというお話から、学校図書館への認識が変わった」「成績などでは評価されない、子どもたちの学びのための場所であるというお話が印象的だった」との声がありました。

学校図書館の現在（いま）を知る展示

展示は、二〇一五年十月二十日～二十九日に開催されました。調べ学習に使う参考書リストはとても充実したものでした。また、学校図書館を使って学習した子どもたちの感想カードからは、「学校司書」がいるからこそ、子どもたちの学びが充実していることがわかりました。さらに、季節ごとの図書館の飾り付けや行事の様子も、展示物の写真や図書館便りから知ることができました。座談会後に、実際に展示を見ていた学生からは「子どもたちが好奇心から作った作品はとても生き生きとしていた」「成績に関係のない学びが、子どもたちにとって重要なことを感じた」といった声が聞かれました。

教育大学の附属図書館ならではの催し

こういった催し物は、私たち教員を目指すものにとってはとても貴重なものと思います。学校図書館に着目することは少ないので、本当に貴重な現場の声を聞く機会であり、教育大学の附属図書館だからこその催しであるように思いました。これからも、私たち教員志望の学生にとって、大切な催しがあると思います。皆さんも、附属図書館の行事に注目してみてはいかがでしょうか。

-Reporter-

松尾 知実
（まつお ともみ）
札幌校・教員養成課程・総合学習開発専攻・環境教育グループ3年

学校教育は、授業だけではなく、学校という環境そのものでも行われていることを改めて感じました。子どもたちにとって学校がよりよい空間になるように、教師として知っておかなければならないことは数多くあると再確認しました。

旭川 キャンパス便り

旭川校・教員養成課程・芸術・保健体育教育専攻・音楽分野４年

岩橋 真理（いわはし まり）さん

旭川校ではサークルや部活以外にも校外で活動している学生たちがたくさんいます。そこで今回は、NPO法人音ねっとなどで活動している岩橋真理さんにお話を聞いてきました！

音楽の活躍の場をもっと広い分野で

―活動内容を教えてください。

ミュージック・ワンダー・クラブ（旭川音楽運動療法連絡会）では、音楽運動療法の研究・実践の場において、患者さんに歌を歌ったり、トランポリンで上下動させるお手伝いをしたりしています。NPO法人音ねっとでは、音楽療法を医術・介護の分野の方々や旭川市内の人々により認知していただけることをねらいとした講座を行ったり、コンサートのお手伝いをしたりする他、同法人が運営する演奏団体「アンサンブルルート♪」において老人ホームなどの施設を訪問して歌やピアノの演奏をしています。

―いつから活動を始めましたか？

ミュージック・ワンダー・クラブは二年生の夏からで、音ねっとは四年生の九月から始めました。

―なぜ活動を始めようと思ったのですか？

私は幼少期より病を患っていたため、身体的にも精神的にも、音楽にいつも支えられてきましたので、人間の健康と音楽がどう関係しているのか、興味を持ちました。また、ボランティアをすることで私自身が癒やされるからです。

―いつから音楽に興味を持っていたのですか？

幼稚園児の頃からです。

―活動を始める前と後で、自分の中での変化を教えてください。

発達障害や病気を抱える人とその家族、音楽療法士、介護や医療に携わる人たちの話を聞く中で、それぞれがいろんな思いを抱えていることが分かりました。

―活動する中でやりがいを感じる時を教えてください。

歌っている時です。あと、活動後の反省会兼打ち上げです（笑）。一緒に活動している方々のお話を聞いている時が一番勉強になります。

―印象深かったエピソードを教えてください。

医療大学や音楽大学に通っている学生と一緒に活動をしたことです。

―他に試してみたい音楽療法の方法はありますか？

療法の一つにカラフルなスカーフを使う方法があるらしく、私もやってみたいです。

―他に挑戦してみたいボランティアはありますか？

旭川市内で行われている「ケアカフェ」という集まりに参加してみたいです。音楽療法について、介護やリハビリに関わる人たちが意見交換をするそうです。

―これからの抱負をお願いします。

音楽による癒やしの効果を患者さんと共に感じながら活動していきたいです。

ボランティア活動中の岩橋さん

ボランティア活動で使っているピアノ

-Interviewer-

山﨑 将太郎（やまざき しょうたろう）

旭川校・教員養成課程・英語教育専攻３年

私たちの大学にはまだまだたくさんのサークルや学生団体があり、それぞれが私たちの目に見えないところで活動しているということを今回のインタビューを通して改めて実感しました。岩橋さんのように、自分の得意分野で交流や社会貢献ができると、とてもやりがいを感じることができます。そのような機会を設けてくれるサークルや団体が身近にたくさんあるということを今回のインタビューで知ってもらえたら、とてもうれしく思います。

釧路 キャンパス便り

2014年10月、釧路校の女子バスケットボール部は北海道大学バスケットボール選手権大会の2部リーグで優勝し、1部リーグ昇格が決まりました。そして今期も1部リーグ第6位（最下位から3番目）と健闘し、2015年10月、見事1部リーグ残留が決定しました。この成績を獲得するまでの道のりや今後の課題について、部長で学校カリキュラム開発専攻・外国語研究室4年の笹森奏海（ささもり かなみ）さんにインタビューしました。

女子バスケットボール部の1部リーグを勝ち抜いて活躍！

―1部リーグと2部リーグの違いは？

挙げていけば切りがないのですが、明らかに違ったのは「基礎の徹底度」です。強豪チームは、当たり前のことが当たり前にできています。パス一つをとっても、確実につなぎ、確実な判断で得点することができていました。それに加えて、各人のスキルや判断の良さもあり、堂々とプレーしているという印象でした。まずは、基礎練習を重ねていくことが、1部リーグで戦い抜くための必須条件であると強く感じました。

―釧路校女子バスケットボール部のチームカラーは？

一言で言えば、一人一人の個性が強いチームです。良くも悪くも、といったところでしょうか（笑）。でも、その個性を上手く生かしていくことができるチームでもあります。プレーでチームを引っ張る選手、雰囲気を盛り上げる選手、ストイックに自分の得意技を磨く選手、冷静に現状を見抜きアドバイスできる選手、自分の課題と向き合い必死に練習する選手、練習を見ながら選手たちの小さな変化を見抜くマネージャー、とさまざまです。お互いに切磋琢磨しながらも、補完し合って日々活動に取り組んでいます。

また、勝ちたいという意識を持って、行動することができるチームです。人数が少ない分、一人一人の時間調整が非常に重要になります。学生の本分である勉学を軸にしながら、アルバイトなどの時間も尊重することは、実際かなり難しいのですが、部員はそのような現状と懸命に向き合おうと努力しています。こうした点で、一人一人が「責任」を持って行動できるチームだと感じています。

―残留した今の心境、そしてキャプテンとして大変だったことは？

正直に言えば、1部としての実力はまだ備わっていません。チームや個人の課題と向き合っていきながら、長期的に練習計画を組んでいくことが必要だと考えています。二十八年度のリーグでベストパフォーマンスができるよう、着実にチームの良さを伸ばしたいです。

キャプテンとして大変だったことは、練習メニューの組み立てです。人数が少ないと対人練習も思うようにできず、そのような環境に、部員たちも少なからずフラストレーションがたまっていました。釧路の大学で女子バスケットボール部があるのは釧教（北海道教育大学釧路校のリーグにおける略称）だけなので、社会人をはじめとした周りの方々に、現在もなお練習や試合をお願いしています。市内大会があることも、部員のモチベーションをグンと上げてくれました。自分とチームの課題を分析して、ステップアップにつながる最高の機会となったからです。

―今後のチームの目標は？

現在の目標は「次の秋季リーグでベスト4に入ること」です。目標達成のために必要なことは、練習の質を上げていくことはもちろん、「仲間を大事にすること」が最も尊重されるべきだと考えています。練習や試合の改善点をお互い本気で指摘し合いながら、成長し合える関係をつくっていくことが、チーム・プレーの最大の意義だと思うからです。学生らしく謙虚な気持ちと、今バスケットボールができる環境に感謝する気持ちを忘れずに、応援されるチームを目指していきたいと思います。

釧路校女子バスケットボール部1部残留決定直後
（後列左から３人目が笹森奏海さん）

体幹トレーニングをする部員たち

-Interviewer-

湧川 碧斗（わくがわ あおと）

釧路校・教員養成課程・学校カリキュラム開発専攻・体育研究室３年

私もバレーボール部に所属していて、１部リーグと２部リーグの力の差はいつも痛感させられていますが、本学で唯一１部リーグに残留した釧教女子バスケットボール部の部長さんから、強いチームほど基礎が徹底されているというお話を伺い、なるほどと納得しました。28年度の秋季リーグでも、悔いのない試合をして、いい結果が残せるよう頑張ってほしいです。

岩見沢

キャンパス便り

ＪＲ岩見沢駅舎内（有明交流プラザ２階）には本学と岩見沢市が協同して設置した市民と学生の活動情報拠点である「i-BOX（あいぼっくす）」があります。今回、i-BOXの尾崎芳子さんにお話を伺いました。

岩見沢校の情報が集結！ i-BOXってどんなところ？

i-BOXは平成二十一年五月に開設され、芸術・スポーツ活動に関する各種情報の収集・発信、相談および企画立案などを行っています。また、i-BOXスペース内では学生による展示や教育大学についての展示などが行われています。

i-BOXは駅舎内にあるということもあり、ふらりと立ち寄ってくださる方も多いそうですが、教育大学や学生によるイベントの問い合わせや学生と話してみたいという方も訪れるそうです。そんなニーズに応え、平成二十七年の冬からはスポーツ文化専攻を中心に学生もこのi-BOXに滞在しています。

i-BOXを訪れれば主に音楽・美術のイベントなどの情報が手に入り、スポーツ文化専攻の学生とは直接話すことができます。"岩見沢校の情報が集約されていると言っても過言ではありません。各種フライヤーが置いてあるほか、大学案内や美術文化専攻による過去の修了・卒業制作展カタログも無料配布しています。市民や学生はもちろん、岩見沢へ旅行で来た方や受験生など、皆さま是非岩見沢を訪れた際にはi-BOXにお立ち寄りください！

今後のi-BOXでの展覧会

- 3月24日（木）～4月7日（木）
  吉田弥生（日本画）個展
- 4月中旬
  岩見沢校の１年間　写真パネル展
- 4月下旬～5月上旬
  佐藤歩惟（金属工芸）個展
- 5月中旬
  ビジネス文化専攻「ファンドレイジングに関する展示」
- 5月下旬～6月中旬
  三村紗瑛子（油彩画）個展
- 7月上旬～7月中旬
  津田光太郎（油彩画）個展

（左）i-BOXの尾崎芳子さん
（右）スポーツ文化専攻2年
坂下諄弥さん

-Reporter-

壽崎 琴音
（すざき ことね）
岩見沢校・芸術課程・芸術文化コース・アートマネジメント美術研究室 4年

i-BOXには思っていた以上に豊富な情報が揃っていて驚きました。i-BOXという画期的で面白いスペースについて少しでも興味を持っていただけたなら幸いです。

i-BOX情報

開館時間	10時～17時（年末年始は休館。また都合により閉館することがあります）
ホームページ	http://www.hokkyodai.ac.jp/iwa/user/?uid=i-box
Facebook	https://www.facebook.com/hue.ibox/
Twitter	@iBOXhue

函館

キャンパス便り

2015年10月24日に札幌コンサートホールKitaraで第63回全日本吹奏楽コンクール（全日本吹奏楽連盟、朝日新聞社主催）の大学の部が開催されました。道代表として出場した北海道教育大学函館校吹奏楽団は見事銀賞を受賞。受賞後に新団長に就任した渡辺季恵（わたなべきえ）さん（人間地域科学課程・国際文化・協力専攻・欧米文化分野4年）に、全道大会で金賞を受賞して全国大会にたどり着くまでの道のりなどをお伺いしました。

吹奏楽コンクール全国大会 銀賞受賞！

全国大会で銀賞を受賞して写真撮影に応じる。会場の札幌コンサートホールKitaraにて。皆さん素敵な表情です。

どんな団？

四年生引退後の二〇一五年度は、一年生十四人、二年生十二人、三年生十二人、留学生一人の計三十九人で活動しています。初心者はもちろん、中学生、高校生の頃から引き続き吹奏楽をやる人、以前も吹奏楽をやっていたけれど大学で楽器が変わった人、途中から入った人など、いろいろな人がいます。活動は週四回で、平日は三時間半、休日は三時間。「誰もが幸せになる音楽」「仲間を大切にする心」をスローガンとし、「音楽は心」という気持ちを持って日々活動しています。また、「普段からみんなでレクをしたり食事に行ったりと、とても仲が良いです」と笑顔で話す現団長の渡辺さん。楽しそうな団の様子がうかがえます。主な活動は吹奏楽コンクールへの出場のほかに、定期演奏会や施設での依頼演奏、幼稚園・小学校・中学校での音楽教室などがあります。

全国大会出場決定、裏の努力

「全道大会で金賞を受賞し、全国大会に行けると決まったときは最高にうれしかったです。喜びのあまり涙を流す団員も多くいました」と渡辺さん。実は全国大会出場は二〇〇九年以来の五年ぶり。いつも惜しいところまでいくものの、全国大会への切符はつかめずにいました。「四年生の先輩方は特に、全国大会に行くぞという強い気持ちを持って活動しておられました。ですので、その夢がかなったということで、後輩としてもとてもうれしいです」と顔をほころばせながら渡辺さんは話します。しかし、その輝かしい結果の裏には、団員の皆さんの懸命な努力がありました。三、四年生と一、二年生とではカリキュラムが違うため練習時間の調整が難しかったのに加え、授業や実習、留学、アルバイトなどで多忙を極める団員の皆さん。その合間を縫って、日々地道な練習をこなしてきました。全国大会出場は、この積み重なった努力のたまものといえます。また、八月末に全国大会出場が決まってからも、「本番が十月末でしたが、夏休みを挟んだりして実質ちゃんと練習したのは一カ月くらいでした」と渡辺さん。それでも今回は見事銀賞を受賞しましたが、「来年は全国大会で金賞を目指したいと思います！」とさらなる高い目標に意欲をみせます。そして「二〇一六年五月には全団員がステージに立つ定期演奏会も開催いたします。団員間のコミュニケーションを大切に、お客さまに喜んでいただけるような演奏会を作りたいと思っています」と力強い意気込みも。今後の活躍にますます期待です。

普段からにぎやかで楽しそうです！

「とてもやりがいのある部活です！」と話す団長の渡辺季恵さん

-Reporter-

田邊 絵夢
（たなべ えむ）
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・国際協働グループ ２年

毎日夜遅くまで吹奏楽団の練習の音が聞こえていて、すごいなと思っていました。普段の地道な努力の積み重ねが大きな成果を生むのだな、と改めて感じることができました。これからも素敵な音楽をつくっていってください！ 応援しています！

How do you do?

新任の先生方

平成27年10月以降に教育大にいらっしゃった先生方に、下記の項目にお答えいただきました！

1出身地　2出身大学・学部　3前職　4学生時代の夢
5教育大生の印象

読者のほとんどが大学院生ではないので、2ではあえて出身学部を伺っています。

根本　亜矢子（ねもと あやこ）先生

札幌校・特任講師
生活創造教育専攻［食物学］

1釧路市生まれ北海道育ち　2藤女子大学人間生活学部　3藤女子大学食物栄養学科の助手　4「学生時代の夢」は、漠然としていて、これというものはなかったと思います…。　5まだあまり深く係わっていませんが、印象は、自分の考えをしっかりと持ち、自立しているなと思いました。

片桐　正敏（かたぎり まさとし）先生

旭川校・准教授
教育発達専攻［特別支援教育］

1札幌生まれ、札幌育ち　2札幌学院大学人文学部　3浜松医科大学。本学専攻科を出て３年ほど教員をしていました。　4学生時代は夢も希望もなかった。バイトばかりしていて、合間に療育のボランティアをやっていました。　5見知らぬ私に挨拶をしてくれて好印象。学生時代によく学び、よく遊び、恋をして、見聞を広めてください。

池田　祥英（いけだ よしふさ）先生

函館校・特任准教授
国際地域学科・地域協働専攻［社会学］

1埼玉県越谷市　2早稲田大学第一文学部　3東洋英和女学院大学、早稲田大学、武蔵大学、埼玉県立大学、昭和薬科大学、気象大学校、国際こども・福祉カレッジ非常勤講師　4特にありませんでしたが、しいて言えば音楽をもっとやりたかったです。　5失敗してもいいのでいろいろなことにチャレンジしてほしいです。

INFORMATION

学校図書館の現在（いま）を知る展示および座談会を開催しました

札幌館座談会

旭川館座談会

平成27年度図書館活性化プロジェクトの全館企画として、学校司書の仕事をされてきた３人の司書の方にご協力いただき、学校司書の歴史と活動を紹介する展示を全館で行いました。図書館スタッフに聞いたところ、熱心に展示を見ていた学生や講義に利用されたケースもあり、多くの学生に見てもらえたようです。

座談会は、札幌と旭川の２カ所で開催しました。学校司書の方、司書教諭の先生、本学の非常勤講師もしてくださっている小学校の校長先生、教育委員会の方も参加くださり、それぞれの立場からこれからの学校図書館と学校司書の役割などのお話を聞かせていただきました。学生からは、学校図書館をどう運営していくのか、教育の中にどのように活かしていけるのかなど、熱心な質問がされ、活発な会になりました。教育に携わっている方々から職業としての学校職員のお話を直接聞かせていただくことで、学生たちにとってとても勉強になり、また教師になった時に学んだことを活かしてくれるものと思います（札幌キャンパス便り（p.19）に関連記事があります）。

札幌館展示

旭川館展示

釧路館展示

岩見沢館展示

函館館展示

人気講座紹介　RECOMMEND!

「自然」の中で生きる

今回紹介する人気講座は、岩見沢校のスポーツ文化専攻アウトドア･ライフコースの講義で行われるBC（バックカントリー）キャンプです。10日間にわたり山の中で生活をするという、アウトドア･ライフコースのさまざまな実習の中でも過酷で濃厚な人気の（？）授業です！

講座名

野山のフィールド経験実習

岩見沢校［不定期開講］

岩見沢校・芸術･スポーツ文化学科・スポーツ文化専攻・
アウトドア･ライフコース・准教授

濱谷　弘志（はまたに ひろし）先生

PROFILE

信州大学大学院教育学研究科教科教育専攻修士課程修了（教育学）。一般企業勤務後、（公財）日本アウトワード・バウンド協会を経て現職。専門は野外教育、ウィルダネス教育の指導者養成など。趣味は野菜作りと登山、バックカントリースキーだそうです。

―この授業では具体的にどのような活動を行うのですか。

長期間、電気・水道・ガス・トイレなどのライフラインがない自然環境でキャンプを行うことで、日常生活とは懸け離れた時間を送ります。具体的には、まきを拾い、火をおこし、川で水をくみ、食事を作る、夜暗くなるとテントに潜り込みます。また、キノコや木の実、山ブドウ、サルナシなどを採取し食べることで、自然の恵みを享受します。期間中、学生たち自身で時計や携帯電話の使用禁止などのルールを作り、授業に臨みました。

―この授業を通して学生たちにはどのようなことを学んでほしいと思いますか？

このような生活をすることで、普段の便利なものに慣れている自分たちの生活環境を客観的に見つめ、改めて人と自然との関わりについて考えてほしいと思います。また、ライフラインが無い中でも自分たちの工夫次第で生活できるスキルを身に付けてほしいと思います。

―実際に学生たちの様子はいかがでしたか？

学生たちは意外と（？）楽しんで過ごしていたのではと思います。当初、期間中は携帯電話、時計の使用禁止というルールがあり、起床時間を心配していましたが、時には朝６時前に起床し、体操を行うなど時計が無くても意外と生活できることが分かりました。また、今回は普段できていない、毎日規則正しく３食を取るという生活ができ、体重が増えた学生がいたかも？

―アウトドア・ライフコースでは他にはどのような授業がありますか？

1年生では、日帰りでの登山やカヌー、山菜採り、冬には雪上活動の実習があります。2年生では、今回紹介した授業以外にカヤック、縦走登山、沢登り、バックカントリースキーなどがあります。また、野外活動の指導者として必要な、急流救助法のレスキュー３や、野外救急法のWMAといった国際資格を取得するための授業もあります。

―ありがとうございました。

-Reporter-

小松崎 笑帆
（こまつざき えみほ）
岩見沢校・芸術･スポーツ文化学科・スポーツ文化専攻・
アウトドア･ライフコース３年

岩見沢校はユニークな講義や個性的な人たちでいっぱいです。そんな岩見沢校の魅力を発信していきたいです。

大学院生の研究紹介

天津外国語大学・日本語学院卒業
北海道教育大学大学院・教育学研究科（函館校）・
教科教育専攻・社会科教育専修1年

趙 安寧さん
（TYO ANEI）

外から見る日本経済とは……？

日本資本主義の本を片手に、取材に答える趙さん

趙さんは、北海道教育大学の協定校である天津外国語大学日本語学院を卒業されています。中国出身で函館校の大学院に進学したばかりの趙さんが、大学院でどのような研究テーマを選び、日本での生活をどのように見ているのか、少しだけのぞいてみたいと思います。

―趙さんの研究とは？

趙さんは現在、日本経済のさまざまなことを勉強しています。天津外国語大学で日本語を専攻していた趙さんは、日本経済が世界で重要な位置にあること、そして現在の中国経済が、一九八〇年代後半から一九九〇年代前半にかけてのいわゆるバブル期の日本経済に似ていることから、日本経済史に興味を持ったそうです。現在は入学してまだ二カ月（取材当時）ということで、日本経済について勉強し始めたばかりとのことですが、日本経済の移り変わりから、現在の中国で問題になっていることの解決方法なども研究していきたいそうです。

―大学院に進学したきっかけは？

研究に加えて、趙さんが北海道教育大学大学院への進学を決めたきっかけは、大きく分けて二つあります。一つ目は、日本語を学ぶ学生にとっての夢である日本留学を実現させたかったことです。日本に留学したいと思っていた趙さんの目に留まったのが、天津外国語大学と協定を結んでいる北海道教育大学だったそうです。

二つ目は、北海道の風景が好きだったからだそうです。中国映画「狙った恋の落とし方」がきっかけで北海道への中国人観光客が増えたように、趙さんもこの映画で北海道に魅了された一人でした。さらに、寮の同室の友人が大学三年生の時に函館校に語学留学をしており、函館の様子をよく聞いていたそうです。当時友人からは、函館は大都市のようにごちゃごちゃしておらず、静かで住みやすい街だと聞いていたそうです。この二つのこともきっかけとなり、趙さんは北海道教育大学大学院への進学を決めました。

進学後の趙さんは、故郷である中国とは違う函館の街並みや、気温、食べ物などに驚きながらも、とても楽しく生活しているそうです。

―将来進みたい道は？

大学院修了まで一年以上を残す趙さんに、今後どのような道に進みたいのか質問してみました。大学院を修了した後、趙さんは北海道大学の大学院への進学を考えています。そこでさらに経済学を学び、経済学の知識を深めた後には、中国の銀行への就職を視野に入れているそうです。

日本の企業ではなぜだめなのかと尋ねたところ、中国の企業より上下関係が厳しく、ストレスがたくさんたまりそうだと話していました。日本の会社内では、尊敬語・謙譲語・丁寧語の三つを使い分けなければなりません。一方、中国の会社では、丁寧語だけで足りてしまうそうです。日本と中国の似ているようで似ていない部分に、大変驚きました。このような違いは、趙さんが中国出身であるからこそ感じることなのでしょう。

今回取材させていただいた趙さんは、大変日本語がお上手で、笑顔がとても素敵な方でした。函館の新鮮な空気と食べ物がお気に入りのようです。残りの大学院生活で、研究はもちろんのこと、北海道の函館という魅力的な街もぜひ満喫してほしいです。

すべて日本語でノートを取る趙さん

-Reporter-

佐々木 柚香
（ささき ゆか）
函館校・国際地域学科・地域協働専攻・
地域政策グループ2年

今回の取材では、日本と中国の意外な違いに終始驚かされました。趙さんにとって函館で過ごす残りの時間が、一生の思い出になってくれたらいいなと思いました。

保健管理センター発

迷ったら心肺蘇生を開始！

目の前で、突然人が倒れたら、あなたはどうしますか？ 原因は心臓？ 頭？ とっさに正しい判断をすることは、医療従事者であっても簡単ではなく、ましてや一般市民にとっては極めて難しいことです。どうすればよいか分からないときにどうするか？ 心臓マッサージ（胸骨圧迫）を開始しましょう！

心肺蘇生ガイドライン

心肺蘇生の基本的な手技や、なぜそのようにするかという根拠などを示したガイドラインが、5年ごとに改訂されています。国際組織が定めたものに基づき、2015年10月15日に日本版「蘇生ガイドライン2015」が発表されました。ここで強調されていることの中に、①「心停止かどうかの判断に自信が持てない場合も、心停止でなかった場合の危害を恐れずに、直ちに胸骨圧迫を開始する」②「市民救助者は、傷病者が心停止でなかった場合のCPR（心肺蘇生法）による危害を恐れることなく、心停止を疑った場合にはCPRを開始することを推奨する」この2つがあります。

心肺蘇生を開始するのは一般市民

病院のすぐ前で倒れたり、倒れたときに近くに医療従事者がいたりする運のいい人は、そう滅多にいません。病院以外の場所で心停止になると、ほとんどの場合、医療従事者ではない一般市民が心肺蘇生を開始する役割を担うことになります。心停止の人に心肺蘇生をせずにいると、救命率は1分ごとに7～10%ずつ低下していきます。つまり、10分間何もせずに放っておくと、その人の命が助かる見込みはほとんどゼロになってしまいます。現在、119番通報してから救急車が現場に到着するまで平均6、7分かかりますので、場所によっては10分以上かかることになり、救急車が来るまで待っていては、助かるはずの命も助からなくなります。ですから、その場にいる人が、できるだけ早く心肺蘇生を開始することが、命を救うために極めて重要なのです。とは言っても、一般市民にとって、心停止の判定は難しく、心肺蘇生の開始は勇気がいることです。

迷ったら心肺蘇生を開始！

ガイドライン2015では、「心停止かどうかの判断に自信が持てない場合も、心停止でなかった場合の危害を恐れずに、直ちに胸骨圧迫を開始する」ことが強調されました。万が一、心臓が動いているのに胸骨圧迫をしても、悪いことは一つもありません！　意識・反応がない、正常な息をしていない、この2つがそろったら、ためらわずに胸骨圧迫を始めてください。「胸骨圧迫をして骨を折ってしまったらどうしよう」などと心配する人がいますが、善意により心肺蘇生を施した場合は、過失を問われることは決してありません。ガイドライン2015にも「市民救助者は、傷病者が心停止でなかった場合のCPRによる危害を恐れることなく、心停止を疑った場合にはCPR を開始することを推奨する」と明記されました。

命を助けるために、意識・反応がない、正常な息をしていない人がいたら、迷わず胸骨圧迫を始めてください。迷ったら、胸骨圧迫を始めてください。

（保健管理センター・センター長・羽賀（はが） 將衛（まさえ））

国際交流NEWS　各校発　2016.4

釧路校

フィンランド・イナリンスクール訪問団

釧路校から13人の学生が2015年８月末から９月半ばまでの20日間あまり、スウェーデン・フィンランド・エストニアを視察して回り、その中でフィンランド・ラップランド地方のイナリンスクールを訪問し交流しました。

-Reporter-

佐藤 直史
（さとう なおふみ）
釧路校・教員養成課程・地域教育開発専攻・農業と環境教育研究室３年

今回の取材を通して、自分は少数民族について知らないことばかりだなと感じました。フィンランドでは、少数民族の言語を教育に取り入れているのが、日本にはないところですね。自分自身も海外に行ってみたいという気持ちが強くなりました。

TO

フィンランド
イナリンスクール

研修期間
2015年８月26日～９月16日

釧路校・教員養成課程・授業開発研究室および特別支援教育研究室の皆さん※

※釧路校・教員養成課程・授業開発研究室：氏橋瑞希（うじはし みずき）さん（大学院１年）、佐々雅紀（ささ まさき）さん（４年）、佐藤成美（さとう なるみ）さん（４年）、壹ツ石瑞葉（ひとついし みずは）さん（４年）、安田小春（やすだ こはる）さん（４年）、浅川友祈子（あさかわ ゆきこ）さん（２年）、藤原未悠（ふじわら みゆ）さん（２年）、中山 開（なかやま かい）さん（１年）、西 勇気（にし ゆうき）さん（１年）、丸山結梨香（まるやま ゆりか）さん（１年）、安原佳奈（やすはら かな）さん（１年）、山田理乃（やまだ りの）さん（１年）、特別支援教育研究室：郡山 曜（こおりやま あき）さん（１年）

2015年12月21日、釧路校では「フィンランド研修」の参加者たち全員による報告会が開かれました。この研修は授業開発研究室の学生が中心になって、釧路校の国際交流資金の助成を受け催行されたものです。

報告会当日は、参加者全員が次々に、研修の内容や思い出を巧みにプログラミングしてスピーディーに報告を行いました。

この研修の最大の目的は「少数民族の言語教育に学ぶ」ということで、ラップランド（伝統的にサーミ人が住んでいる地域で、スウェーデン・ノルウェー・フィンランド・ロシアの４カ国にまたがる）という特殊な場所において、ともすれば忘れ去られてしまいがちなサーミ語を継承していくために、どのような教育や努力がなされているのかを視察することでした。

授業開発研究室と関わりの深いアイヌ民族の方から提案され、フィンランドのイナリンスクールと連絡を取り合う関係が生まれ、一昨年に引き続いてこの研修が行われました。実際の研修期間は20日あまりでしたが、その計画やゼミは2014年の前期に始まっているので、トータルして１年半にわたる研究・研修活動だったそうです。

一口にサーミ語といっても９種類ほどありますが、フィンランド・イナリ湖のそばにあるイナリンスクールでは、イナリサーミ語とノーザンサーミ語の授業が行われています。イナリ周辺でサーミ語を話す人はまれで、今やほとんどの人がフィンランド語を母語としているので、サーミ語教育は日本でいうと、英語教育に当たるようなもの。授業内容は会話など話し合う活動が中心です。スクールから100kmも離れた所に住んでいる子どもが、テレビ通信で授業を受けている場面も視察したということです。

イナリンスクールは９年制（小学校１年生から中学校３年生まで）で、幼稚園に当たる０年生も設けられています。基本的には６時間授業で１校時は45分間。給食の時間が日本より早く、３・４校時の間の40分間にカフェテリアで昼食を取り、４・５校時の間の20分間に軽食を取るというものです。また、３学年一緒の複々式の授業も積極的に行われています。

訪問団に参加した氏橋さんは、「イナリンスクール訪問の最終日、研修前に学んでおいたアイヌの踊りを私たちが披露したら、小学生たちが私に抱き付いてきてくれたんです」と、感慨深げに思い出の一コマを話してくれました。

また、引率された授業開発研究室の倉賀野志郎先生は、「この研修は、ホテルや乗り物の手配から自炊の計画まで、学生自身が企画立案に関わっています。こうした外国での生活経験を大事にして、外国を遠い存在から近い存在に感じてほしいし、外国から日本を見る目も養ってもらいたい。大学生活の中では長期留学が難しいので、短期間でも外国で生活する経験をさせてあげたい」と、語られました。

フィンランド語でアイヌ舞踊の説明をする安原さん

アイヌ舞踊に見入るイナリンスクールの児童たち

民族衣装をまとったイナリンスクールのElle-Maaret先生と

フィンランド・ロヴァニエミで本場のサンタさんと

釧路校・教授
倉賀野志郎先生

国際交流NEWS　国際交流・協力センター発　2016.4

第13回

留学中の学生からの協定校紹介

留学中や帰国直後の学生から届いた文章と写真で、北海道教育大学の全学協定校を紹介します。13回目の今回は、アメリカのアラスカ大学アンカレッジ校と中国の瀋陽師範大学です。

TO

アメリカ合衆国
アラスカ大学アンカレッジ校

留学期間
2015年８月～12月

寺下 浩平（てらした こうへい）さん
札幌校・教育学研究科・教科教育専攻・英語教育専修２年

アラスカの雄大な自然

広い大学敷地内

アラスカのオーロラ

大学に現れる野生のムース

私は2015年８月から12月までアラスカ大学アンカレッジ校に留学しました。雄大な自然の中で、伸び伸びと留学生活を送ることができました。

私が住んだアンカレッジはアラスカの中ではそれほど寒くない地域ですが、11月に気温が−20℃近くまで下がることもありました。そんな夜には、きれいな星空やオーロラをしばしば見ることができました。

アラスカには多くの外国人、そしてアラスカの先住民が住んでおり、人種や文化によって考え方や個性に違いがあります。ここではその違いを受け入れながら生活するのが当たり前ですが、一般的に日本では他国の人々と共に生活することはありません。留学ではそのような人々と一緒に生活するのでとても刺激的ですし、日本では経験できない人間の多様性を実感することができます。

私が受けた授業はESLという、外国の人が英語を学ぶためのクラスでした。先生は親切で、授業中いつでも質問に答えてくれますし、学生とのコミュニケーションを意識して授業を進めていきますので、安心して授業に臨むことができました。

留学は、何かを得たいという強い気持ちがあれば、きっと人生に大きな影響を与える財産を得ることができます。悩むより行動、結果は後でついてくるでしょう。

TO

中国
瀋陽師範大学

留学期間
2015年３月～2016年１月

藤澤 慎司（ふじさわ しんじ）さん
旭川校・教員養成課程・国語教育専攻４年

瀋陽は中国の東北地方、遼寧省に位置する都市です。遼寧省の省都であり、交通・工業など近年発展の目覚ましい都市です。清代には都も置かれたため、世界遺産に登録された瀋陽故宮のような歴史的価値の高い建築物があるのも特徴です。

瀋陽師範大学の国際教育学院では総合・口語・聴力・写作の授業が行われます。クラスはＥからＡまであり、自分のレベルに合わせてクラスを選ぶことができます。韓国、ロシア、インドなど世界各国から学生が集まっており、交流することも可能です。

国際教育学院付近には数多くのレストランがあり中華料理を楽しむことができます。値段も比較的安く、10元（190円前後）あればお腹いっぱい食べることができます。また、国際教育学院の１階のカフェにはいつも多くの学生が集まり、中国語を使って会話練習や交流を行っています。

どこへ留学するにしてもさまざまなことを考えるきっかけを与えてくれるのが留学の価値の一つだと思います。私自身、今回の留学では日中関係について深く考えさせられました。悩んだこともありました。しかし、これを含めた中国でのすべてはこれから自分がするべきことを示してくれた気がしています。

友人と瀋陽の故宮で撮影
（本人は左から2番目）

友人とバレーボール大会に参加
（本人は左から2番目）

瀋陽師範大学内にある
国際教育学院

INFORMATION

卒業生・修了生に係る証明書発行手数料の有料化についてお知らせ

本学では、証明書発行に伴う業務コストや受益者負担の観点から、平成27年4月1日請求分より卒業生・修了生に係る証明書発行手数料を有料としました。

なお、本手数料については、学生支援として活用させていただきますので、本趣旨をご理解くださいますようお願いいたします。

◉有料対象者

卒業生、修了生、退学者および除籍者

※科目等履修生、研究生等の非正規生も含みます。

ただし、本学の外国人留学生であった者、かつ、現在日本国外に居住または滞在する者を除きます。

◉発行手数料（1通につき）

和文（日本語）証明書 …… 500円

英文証明書 …… 1,000円

有料化に関するお問い合わせ

北海道教育大学財務部
財務課総括グループ
TEL：011-778-0446

証明書の請求方法に関するお問い合わせ

北海道教育大学
［札幌校］
教務課修学支援グループ
TEL：011-778-0320・0321
［旭川校］学務グループ
TEL：0166-59-1230
［釧路校］学務グループ
TEL：0154-44-3229
［函館校］学務グループ
TEL：0138-44-4370
［岩見沢校］学務グループ
TEL：0126-32-0232
札幌駅前サテライト
TEL：011-211-4100

札幌駅前サテライト≪hue pocket≫

ーみなさん、サテライトを活用していますか？ー

北海道教育大学札幌駅前サテライト（愛称：hue pocket）は本学の情報発信の拠点であり、教育・研究の推進、地域貢献、生涯学習及び学生の就職支援の場です。

講義、各種イベントの開催に加え、本学の学生には以下のような利用方法があります。

アクセスの便利なサテライトをぜひご活用ください。

◉自習コーナーが利用できます

自習や企業訪問・面接などの準備・資料作成の場所として活用できます。また、卒業後も利用できます。

主な設備

- 自習用テーブル
- パソコン（5台）
- プリンター（用紙はご持参ください）
- コピー機（有料：コイン式）
- ロッカー
- 新聞・書籍（教採参考書など）

自習コーナー

◉各種証明書が発行できます

以下の各種証明書の交付を行っています。各種証明書交付願に必要事項を記入・提出いただくことにより、その場で証明書をお渡しします。

交付可能な証明書

- 在学証明書
- 成績証明書
- 卒業見込証明書
- 修了見込証明書
- 教員免許状取得見込証明書（ただし大学教育情報システムに登録した免許種。また大学院生は除きます）
- 旅客運賃割引証（学割証）

交付時間

- 平日　9：00〜20：30
- 土・日・祝　9：00〜16：30

◉教室が利用できます

使用人数に合わせ、大小の教室を利用できます。また、ビルの1階で各種イベントなどを行うことも可能です。（要予約申請）

主な利用方法

- 大学院の授業
- 学内学生団体（承認されているサークル）の活動
- ゼミナールに準じた活動
- 展覧会・各種イベント

写真サークルのイベント

学生展覧会

詳しくは、ホームページをご覧ください
http://www2.hokkyodai.ac.jp/satellite/

北海道教育大学　札幌駅前サテライト（hue pocket）
札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55 4階
地下鉄南北線「さっぽろ駅」下車、ＪＲ「札幌駅」西口より徒歩２分
Tel：011-211-4100　Fax：011-211-4891
開館時間　●平日　9：00〜21：30　●土・日・祝　9：00〜17：00

学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局から

編集後記

▶第24号の編集にご協力くださいました学外・学内の皆さま、誠にありがとうございました。

今回の特集は、「大解剖！　気になる実習、噂の研修。」です。教育大学の実習と言えば、まずは教育実習を思い浮かべる方が多いと思います。ただし教育実習はどのキャンパスでも行われていますので、今回は敢えて教育実習ではなく、各キャンパスで行われているユニークな「実習・研修」をクローズアップして紹介する特集を組んでみました。

今、大学教育で注目されている（そして小・中・高等学校教育にも広まりつつある）キーワードの一つに「アクティブ・ラーニング」（知識伝達だけを行う講義形式の授業ではなく、学生の能動的な活動による学習を組み込んだ教育活動）があります。今回の特集の記事で取り上げられている各キャンパスの取り組みは、まさにアクティブ・ラーニングです。この記事を通して、北海道教育大学5キャンパスで個性豊かに展開されている「能動的な学び」の姿から、学生の皆さんが互いに刺激を受けてくれたらうれしく思います。

▶今号の巻頭には、27年10月より本学第13代学長に就任されました蛇穴治夫学長へのインタビュー記事を掲載しました。学生の皆さんにとって学長は遠い存在かとは思いますが、今後4年間、本学の舵取りをされる蛇穴先生のお人柄、学長としてのお仕事や北海道教育大学に対する熱い思いを感じ取っていただければ幸いです。

▶編集局長の札幌校の田口　哲です。編集局長就任後2号目の編集を終え、編集過程の全体像がようやくつかめてきましたが、まだ慣れたとは言えません（笑）。少しずつではありますが、より良い学園情報誌になるよう努めていきたいと思います。今号では、これまでよりも本文のフォントを少し大きくすることで読みやすくしてみました。本誌改善のアイディアがありましたら、編集局までお寄せいただければと思います。

▶前号までの編集局の学生スタッフのうち、札幌校の月居麗羅さん、旭川校の下宮遼太郎さん、函館校の奥寺栞織さん、藤原めぐみさん、増森彩香さん、岩見沢校の藤平佳奈さんが前号で退任されました。お疲れさまでした！

今号から新たに、旭川校の岩橋　瞳さん、函館校の佐々木柚香さん、浜田亜弓さん、傳法悦子さん、岩見沢校の小松崎笑帆さん、渡部早稀さんが学生スタッフに就任されました。新メンバーの皆さん、どうぞよろしくお願いします。

感想・意見・要望・情報・アイデア募集中！
歓迎！　らくがきイラスト・写真・その他の投稿！

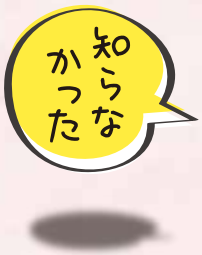
▶○○の活躍を取り上げてほしい、○○が面白そうなので取材してみては？　など、本誌についてのご意見・ご要望などをお寄せください。可能な限り掲載させていただきますので、下記の編集局のメールアドレスまでお知らせください。

▶本誌の各ページを飾る「らくがきイラスト」も、随時募集しています。各キャンパスの編集局員の先生方に渡すなどしてください。
その他、写真やイラストなどの画像、書・絵画・彫刻・工芸などの作品を写した写真の投稿も歓迎します。画像ファイル（拡張子がjpg）を添付したメールを、編集局のメールアドレスまでどうぞ。

ご意見・ご感想・ご要望を編集局にお寄せください！
メールアドレス　landscape@s.hokkyodai.ac.jp

本誌バックナンバーは北海道教育大学ホームページで読むことができます。

HUE-LANDSCAPE　検索



HUE-LANDSCAPE は
学生スタッフが大活躍する学園情報誌です！

山﨑 将太郎
旭川校

岩橋 瞳
旭川校

中村 朱莉
岩見沢校

壽崎 琴音
岩見沢校

小松崎 笑帆
岩見沢校

渡部 早稀
岩見沢校

湧川 碧斗
釧路校

佐藤 直史
釧路校

松尾 知実
札幌校

堀江 音名
函館校

田邊 絵夢
函館校

佐々木 柚香
函館校

傳法 悦子
函館校

浜田 亜弓
函館校

編集局の E-mail ▶ landscape@s.hokkyodai.ac.jp

HUE-LANDSCAPE に関するご意見、ご感想をお気軽にお寄せください。
企画案や写真・イラストも、常時募集しています!

HUE-LANDSCAPE
Spring/Summer 2016 No.24

平成 28 年 4 月　発行
発行：国立大学法人 北海道教育大学
編集：北海道教育大学学園情報誌 HUE-LANDSCAPE 編集局
編集局長／田口　哲（札幌校）
編集局員／菅野　悟（旭川校）　渡部　謙一（岩見沢校）
鴨川　太郎（釧路校）　今　尚之（札幌校）
竹中　康之（函館校）
編集協力：株式会社須田製版

北海道教育大学ホームページ
http://www.hokkyodai.ac.jp/